

七会村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

戸倉館跡

平成3年3月

茨城県西茨城郡七会村教育委員会

七会村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

戸倉館跡

平成3年3月

茨城県西茨城郡七会村教育委員会

序

七会村は、児童生徒が心身共に健康で、生き生きと学校生活が送れるようにしていくため学校施設の老朽化に対処して、長年の懸案でありました学校建設に取り組んでまいりました。

平成元年度は、七会村立東小学校校舎の建設に着手し、平成2年3月に竣工致しました。

次いで、七会村立西小学校校舎建設の気運が高まり、その実現に向け、平成2年6月14日に七会村徳蔵931番地に建設することを決定しました。

学校建設予定地が周知遺跡（戸倉館跡）に所在していることから、その造成工事前に遺跡の発掘調査をすることになり、平成2年10月15日から平成2年12月2日まで調査を実施したわけであります。

御承知のとおり、文化財は歴史・文化の正しい理解のため欠くことの出来ないものであり、かつ、将来の文化向上発展の基礎をなすものであります。特に、埋蔵文化財につきましては、古代住民の生活様式を解く鍵として貴重なものであります。

本調査の作業には、七会村文化財保護審議委員さん方をはじめ多くの方々があたってくれました。毎日、一生懸命、発掘作業に従事され、予定どおり無事終了し、多くの遺構と遺物を発掘することができましたこと、その御苦労に対し、深く感謝申し上げます。

今般、その調査報告として、ここに、すばらしい「戸倉館跡発掘調査報告書」を発刊されたことは、大きな喜びであると同時に、調査主任として御指導頂きました萩原義照先生、さらには、関係されました皆様に対し、深甚なる感謝の意を表する次第であります。

ここに、発掘されました建築遺構や遺物は、先人の貴重な遺産でありますから、これを保護し後世に残すべく銳意努力していくつもりでございます。

最後になりましたが、本調査のために、御指導、御協力賜りました県教育庁文化課・県教育財團・水戸教育事務所並びに関係市町村の皆様に対し、感謝申し上げるとともに、今後益々の御活躍を御祈念申し上げます。

平成3年3月

七会村長 岩下 金司

序 (発刊にあたって)

児童生徒が全人格形成を目指して教育活動を展開する中心となるところは、言うまでもなく、学校であります。

学校の環境は、その意味において、児童生徒に重大な影響をおよぼし、その物的、質的向上が望まれていることは誰しも認めるところであります。

七会村においても、学校施設の老朽化解消のため、平成元年度、七会村立東小学校校舎建設に着手し、平成2年3月に竣工致しました。

平成2年6月に、もう一つの小学校であります七会村立西小学校校舎建設が七会村徳蔵931番地に決定しました。予定地は、周知遺跡（戸倉館跡）に所在している関係上、その造成工事前に発掘調査をし、記録保存するため、本調査を実施した訳であります。

この調査によって、先人の残した貴重な遺構・遺物等が検出され、七会村の歴史を解明する上で多大な成果を上げることが出来ました。

本書が、研究の資料としてはもとより、我が郷土、七会村の歴史の理解を深めさせ、ひいては教育文化の向上の一助として、広く活用されることを希望してやみません。

最後になりましたが、発掘調査および調査を進めるにあたり、県教育庁文化課・県教育財団・水戸教育事務所・関係市町村の皆様および発掘主任の荻原義照先生、七会村文化財審議委員の皆様に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成3年3月

七会村教育委員会

教育長 阿久津 進

例　　言

- 1 本書は、西茨城群七会村立西小学校建設工事に伴う、発掘調査の報告書である。
- 2 調査は七会村教育委員会が主体となり、萩原義照が調査担当し、平成2年10月15日から同12月15日まで実施した。
- 3 報告書のうち、調査に至るまでの経過については、久下沼四郎氏が、また七会村遺跡の概要については池田晃一氏が担当した。
- 4 遺物の整理注記は須田進氏、写真は生井友一氏が担当した。
- 5 調査区内遺構の実測は、根本幸治氏、菊池タマ氏の協力に寄るものである。
- 6 調査期間中に御来訪いただき、ご指導・ご助言を賜りました筑波大岩崎教授・西野助教授、茨城県歴史館瓦吹堅氏・県教育財团本部鯉瀬和彦氏・同斎藤真人氏、水戸教育事務所門井洲雄氏・同千種重樹氏、笠間市史編纂室長富田福二氏・同係主事長谷川修氏、また川井誠氏・飯島昌氏に厚く感謝の意を表わすものである。
- 7 発掘調査に当たって、七会村文化財保護審議委員会長阿久津忠一氏外委員の方々には、格別のご協力とご配慮いただいた。なお、調査関係の組織及び発掘作業に直接参加くださった、村内有志の氏名を巻末に記し謝意したい。
- 8 最後に村当局、並びに教育委員会事務局の皆様にここで御礼を述べたい。



目 次

序

序

例 言

七会村全図

七会村長 岩下 金司
同教育長 阿久津 進

| | |
|-------------------------|----|
| 第1章 位置と環境 | 1 |
| 第1節 地理的環境 | 1 |
| 第2節 歴史的環境 | 2 |
| 第3節 七会村遺跡の概況 | 5 |
| 第2章 調査経緯 | 7 |
| 第1節 調査に至るまでの経過 | 7 |
| 第2節 調査経過 | 10 |
| 第3章 調査の概要 | 16 |
| 第1節 調査の概要 | 16 |
| 第2節 遺構について | 17 |
| 1 堀跡について | 17 |
| 2 土壘について | 17 |
| 3 井戸状遺構について | 19 |
| (1) 1号井戸 | 19 |
| (2) 2号井戸 | 20 |
| 4 窓穴遺構について | 21 |
| 5 土坑について | 25 |
| 6 掘立柱建物跡について | 29 |
| 7 その他の遺構について | 30 |
| (1) 溝状遺構 | 30 |
| (2) 地墳溝 | 30 |
| (3) 落とし穴状遺構 | 30 |
| (4) 炭窯 | 30 |
| 第3節 遺物について | 32 |
| 1 陶磁器 | 32 |
| 2 鉄（銅）製品 | 32 |
| 3 石製品 | 32 |
| 図 版 | 43 |
| 終章 むすび | 73 |
| 発掘調査組織表・発掘調査参加者名簿 | 74 |
| 付. 德蔵地区地名表 | 75 |

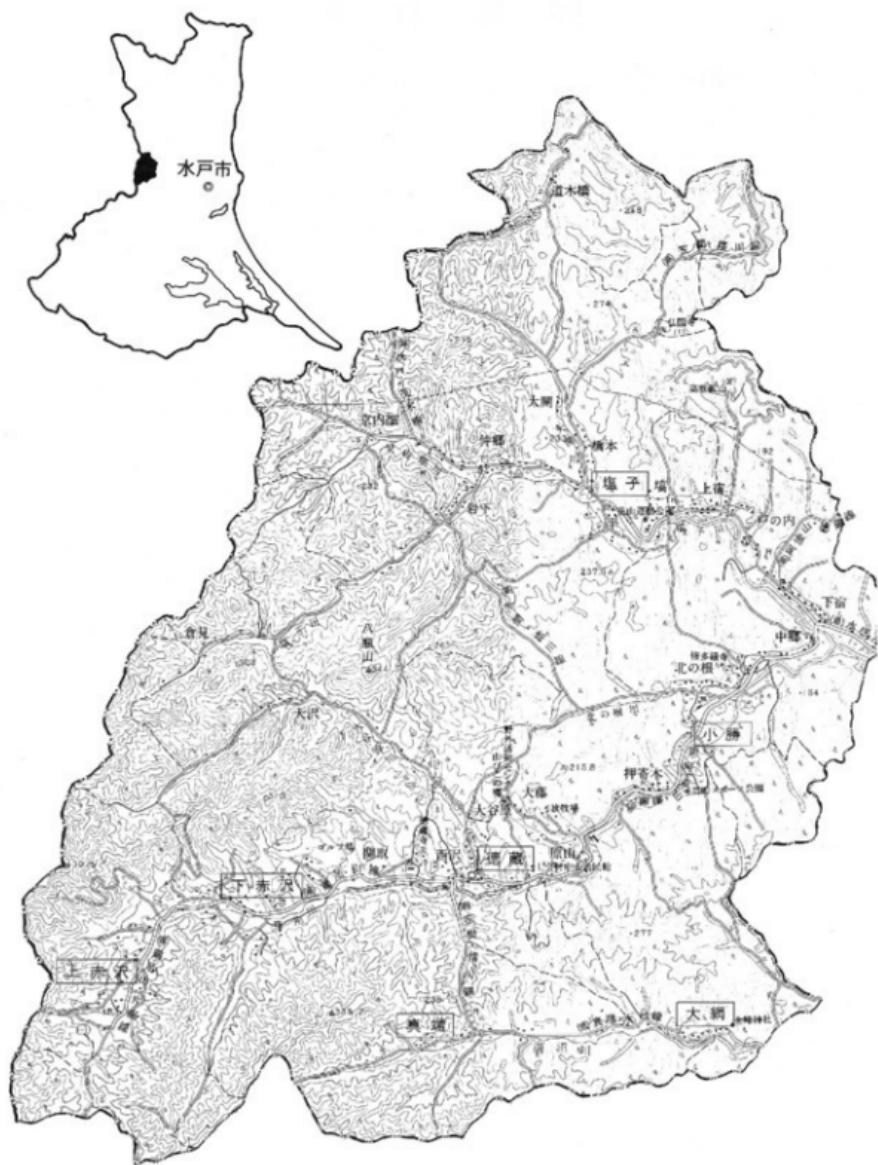
挿 図 目 次

| | | |
|------|----------------|-----|
| 第1図 | 七会村全図 | |
| 第2図 | 遺跡周辺の地形図 | 1 |
| 第3図 | 戸倉館跡縄張り想定図 | 3～4 |
| 第4図 | 七会村遺跡分布図 | 6 |
| 第5図 | 調査区遺構配置実測図 | 8～9 |
| 第6図 | 調査区トレンチ設定図 | 16 |
| 第7図 | 塹跡実測図と土壠断面図 | 18 |
| 第8図 | 1号井戸実測図 | 19 |
| 第9図 | 2号井戸実測図 | 20 |
| 第10図 | 竪穴遺構実測図 | 22 |
| 第11図 | 竪穴遺構実測図 | 23 |
| 第12図 | 竪穴遺構実測図 | 24 |
| 第13図 | 土坑実測図 | 26 |
| 第14図 | 土坑実測図 | 27 |
| 第15図 | 土坑実測図 | 28 |
| 第16図 | 掘立柱建物跡実測図 | 29 |
| 第17図 | 溝状遺構実測図 | 30 |
| 第18図 | 落とし穴状遺構実測図 | 31 |
| 第19図 | 灰釉陶器片実測図 | 33 |
| 第20図 | カワラケ実測図 | 34 |
| 第21図 | 片口・おろし皿・擂鉢片実測図 | 35 |
| 第22図 | 内耳土器実測図 | 36 |
| 第23図 | 内耳土器実測図 | 37 |
| 第24図 | 内耳土器実測図 | 38 |
| 第25図 | 鉄製品実測図 | 39 |
| 第26図 | 石製品（石臼）実測図 | 40 |
| 第27図 | 石製品（石臼）実測図 | 41 |
| 第28図 | 石製品（砥石） | 41 |

図版目次

- | | | | |
|------|--------------|------|---------------|
| 図版1 | ・戸倉館跡遠景 | 図版30 | ・10号土坑 |
| 図版2 | ・調査前の伐開 | 図版31 | ・11号土坑 |
| 図版3 | ・遺構確認状況（空影） | 図版32 | ・12, 13号土坑 |
| 図版4 | ・調査区遺構全景 | 図版33 | ・14号土坑 |
| 図版5 | ・1号堀跡（薬研堀） | 図版34 | ・16号土坑 |
| 図版6 | ・2号堀跡（堀底跡） | 図版35 | ・17号土坑 |
| 図版7 | ・堀跡（A-A'）土層 | 図版36 | ・落とし穴状遺構1号 |
| 図版8 | ・堀跡（B-B'）土層 | 図版37 | ・落とし穴状遺構2号 |
| 図版9 | ・堀跡（C-C'）土層 | 図版38 | ・落とし穴状遺構3号 |
| 図版10 | ・土壘 | 図版39 | ・落とし穴状遺構4号 |
| 図版11 | ・土壘と堀跡 | 図版40 | ・掘立柱建物跡（A棟） |
| 図版12 | ・1号井戸 | 図版41 | ・炭窯 |
| 図版13 | ・2号井戸 | 図版42 | ・内耳土器 |
| 図版14 | ・1号竪穴遺構 | 図版43 | ・内耳土器（耳部） |
| 図版15 | ・1号竪穴遺構内遺物出土 | 図版44 | ・内耳土器（耳部） |
| 図版16 | ・2号竪穴遺構 | 図版45 | ・内耳土器（耳部） |
| 図版17 | ・3号竪穴遺構 | 図版46 | ・内耳土器（体部） |
| 図版18 | ・4号竪穴遺構 | 図版47 | ・常滑焼（甕破片） |
| 図版19 | ・5-6号竪穴遺構 | 図版48 | ・常滑焼（甕破片） |
| 図版20 | ・7号竪穴遺構 | 図版49 | ・常滑焼（甕破片） |
| 図版21 | ・8号竪穴遺構 | 図版50 | ・常滑焼（甕破片） |
| 図版22 | ・1号土坑 | 図版51 | ・灰釉陶器片 |
| 図版23 | ・2号土坑 | 図版52 | ・カワラケ |
| 図版24 | ・3号土坑 | 図版53 | ・片口・おろし皿・すり鉢片 |
| 図版25 | ・4号土坑 | 図版54 | ・鉄製品・鉄滓 |
| 図版26 | ・5号土坑 | 図版55 | ・古銭・銅製品 |
| 図版27 | ・6号土坑 | 図版56 | ・石製品（石臼） |
| 図版28 | ・8号土坑 | 図版57 | ・石製品（石臼） |
| 図版29 | ・9号土坑 | 図版58 | ・石製品（砥石） |

七会村全図



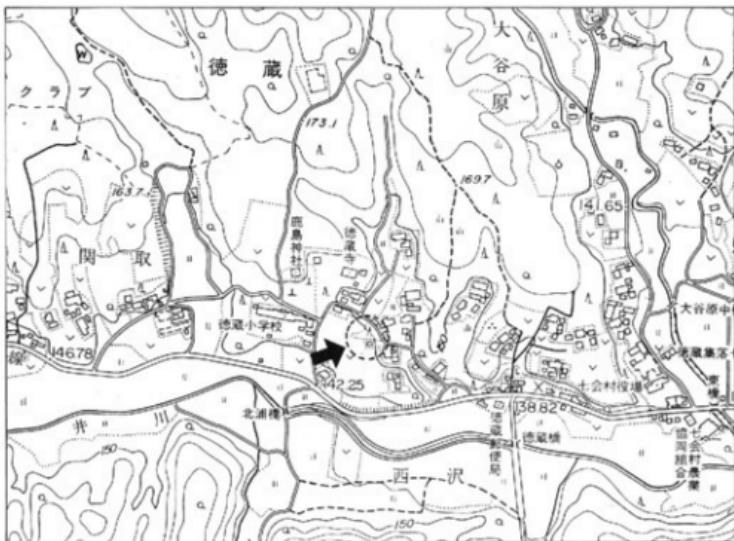
第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡は、西茨城郡七会村大字徳蔵字西沢831番地外に所在し、館・館の前・中丸・下坊跡（現徳蔵寺）と呼ばれる所が、戸倉館跡に含まれると考えられる。

この城館跡の範囲は、八瓶山（344.m）南麓の藤井川に伸びる舌状台地に会って、現在中央体育や真言宗の引布山徳蔵寺がある。

七会村は、茨城県の北西部に位置し、東は常北町・桂村、北に御前山村、西は栃木県茂木町と境している。総面積63.42平方キロメートルを有し、地形は不整形の四角形を呈し鷁足山（430.m）・花香月山（378.m）・八瓶山・高取山（355.5m）・高田山（255.4m）等の山々に囲まれている。集落は、藤井川・塩子川・涸沼川の流域に開けた微高地に見られる。明治22年町村制の施行によって、旧徳蔵村・旧上赤沢村・旧下赤沢村・旧大綱村・旧真端村（旧笠間領）と、旧子勝村・旧塩子村（旧水戸領）の7か村を合わせて、七会村となり現在に至っている。



第2図 遺跡周辺の地形図

第2節 歴史的環境

七会村は、明治22年七つの旧村が一つに会して（合併）して誕生した。村名の由来も、これによるものであろう。大化改新によって地方制度が定められて、塙子・小勝は那珂郡に、徳藏・上赤沢・下赤沢・真端・大綱は新治郡に属した。のち郷里制により、常北町の上古内・下古内・等と共に、塙子・小勝は鹿島郷に入った。この地方の鎮守に、鹿島神社がまつられているのは、鹿島神領の一部であったためであろう。中世に至っては塙子荘とも呼ばれた。

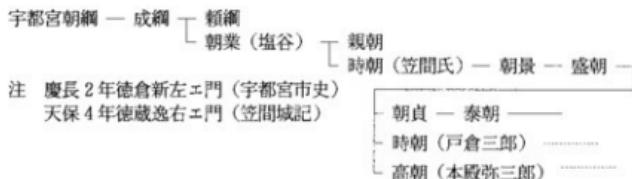
新治郡井田郷に属した徳藏・上赤沢・下赤沢・真端・大綱地区は、中世郡の東辺の地であるので、東郡または笠間郡とも称した所である。

徳藏に、弘法大師の創建と伝えられている、真言宗の引布山徳藏寺がある。笠間城記に「仄に聞くところによると、笠間佐白山に真言宗の正福寺があって、100余の僧坊が軒を並べその勢い盛んであった。一方下野に境した、八瓶山には徳藏寺が300坊あり、双方仏法を軽んじ武器をもって、争いが絶えなかった。笠間方は、多勢の徳藏方に毎度苦戦した。そこで笠間正福寺の生田坊は、援軍を宇都宮頼綱に求めた。元久2年3月頼綱の甥塩谷時朝が、笠間に進入し石井原に陣して、徳藏寺を攻撃し、これを一挙に滅ぼした。次いで時朝は笠間正福寺をも破却して、笠間地方を押領した。」これが笠間氏の始めである。後南北朝時代のころ、笠間盛朝の2男三郎時朝が、隣国佐竹領にたいしての境目城として、また宗家宇都宮の連絡拠点として、ここ八瓶山麓徳藏の台地に居館したのが戸倉館である。また近くの荻原に、戸倉氏関連と思われる屋敷跡（館跡）がある。小勝地内には、佐竹氏の出城とみられる、二反田城跡と四方とや城跡が所在する。

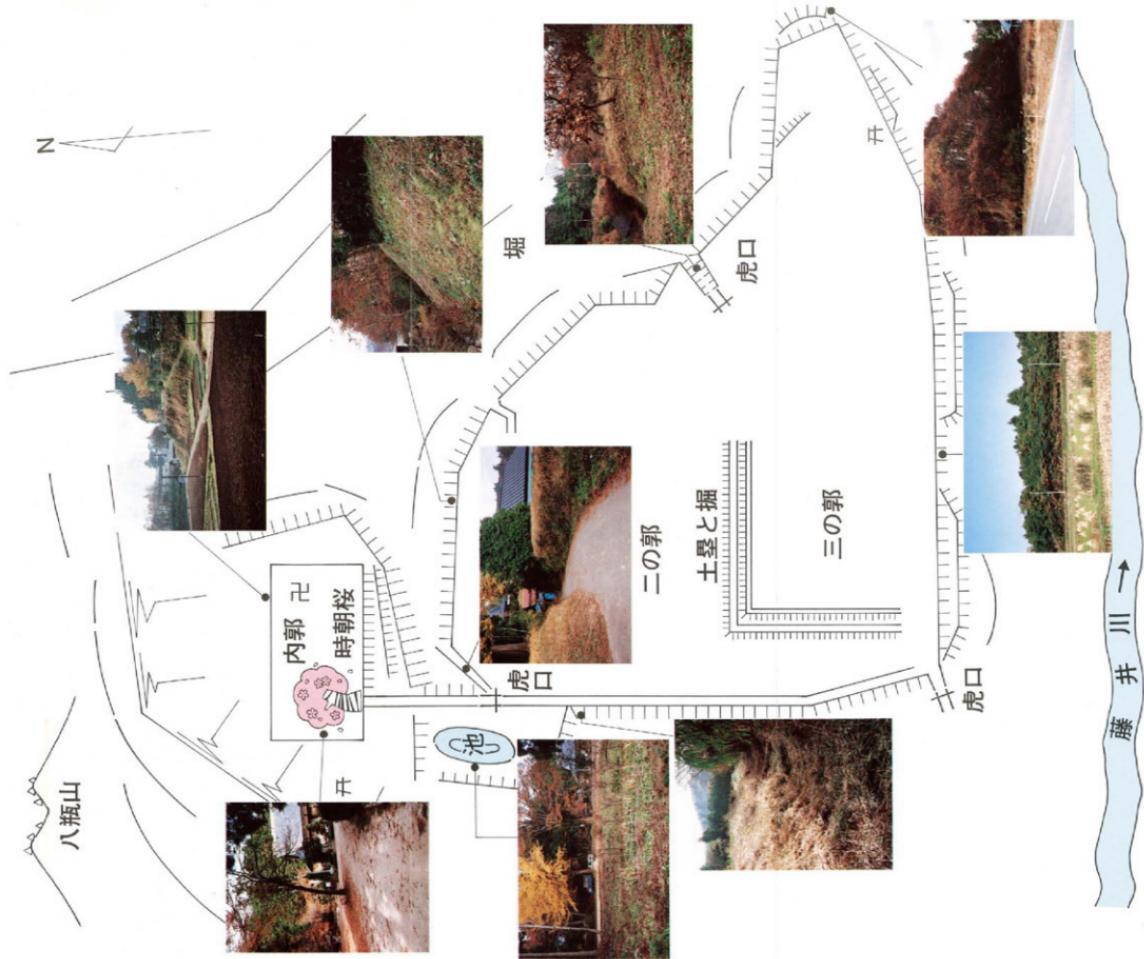
戸倉氏（徳藏氏に同じ）は、笠間（宇都宮）氏の一族で、中世徳藏地域を支配した小土豪であろう。その出自動向については明らかでない。『宇都宮系図・新編常陸國誌・姓氏家系大辞典』によると、「戸倉氏は宇都宮氏族で、常陸国新治郡徳藏村よりおこる。笠間盛朝の2男三郎時朝、徳藏（戸倉）に住し戸倉氏を称す。戸倉氏は常陸の名族で、徳倉も戸倉に同である。」

戸倉館跡の縄張りは、現徳藏寺の所在するところから、南へ延びる標高152～153mの舌状台地一帯と想定される。本調査は外郭の一部約1300m²である。

表1 笠間氏・戸倉氏関係系図



戸倉館(城)縄張り想定略図



第3節 七会村遺跡の概要

七会村の遺跡を特徴づけるのは、縄文時代と中世の遺跡である。現在、村内で遺跡台帳に登録されている遺跡は8ヶ所であるが、いずれも縄文時代の遺跡と中世の城館址である（分布図参照）。縄文時代の遺跡は早期から後期にかけてのものである。本地域が石器の原石となるチャートの産出地であることから、各遺跡ともチャートの剥片が多量に散布しており、石器も量的に多い。あるいは、当時、本地域が他地域への石材の供給地となっていたことも考えられる。

中世の城館址は、登録されているもの以外にも数多く存在しているようだ。多くの城館址が残されたのは、当時、本地域が三百坊を擁したというほど徳蔵寺が勢力をふるっていたことや、その後、笠置・佐竹氏等の境界線となり軍事上重要な地点であったことなどがその理由であろう。

その他の時代の遺跡は、今のところ確認されていないが、村内に保管されている遺物には、縄文時代や中世以外の遺物もあり、今後の調査が待たれるところである。

次に、現在、遺跡台帳に登録されている遺跡の概要を述べる。

○縄文時代の遺跡

1. 塙遺跡 塙子2686ほか 約5000m²

高取山南麓の舌状台地上に位置し、南側を塙子川が蛇行して東流する。遺跡の現状は山林となっており範囲は明確でない。石鎌や石斧が出土したことのあるが、時期は不明である。

2. 中郷遺跡 小勝603ほか 約4500m²

藤井川と塙子川の合流点に突き出た舌状台地上に位置する。現在は小松山になっており遺跡の確認は困難であるが、第2次大戦中開墾された際、縄文時代の土器片や石器が出土したといいう。時期は縄文時代後期とみられる。

3. 北の根遺跡 小勝1730ほか 約2500m²

八瓶山東麓の南側に開けた浅い谷部に位置する。南側を北の根川が東流する。林道がつくりられ水田が営まれている。縄文時代の土器片が散布する。時期は縄文時代後期のものと思われる。

4. 山の田遺跡 徳蔵1159-2 約5000m²

八瓶山南麓の高台に位置し、遺跡の西側を大谷原川が南流する。ゴルフ場の建設工事中に発見された。出土遺物は、縄文時代の土器片が主で、その他に磨製石斧と、少量だが須恵器片も含まれている。条痕文系の土器片が多いことから遺跡の主な時期は縄文時代早期と考えられる。

○中世の城館址

5. 二反田城跡 小勝1816ほか 約5000m²

北の根川と藤井川にはさまれた尾根上に位置する。遺構としては、土塁の一部ともみられるものが残っているが、規模は大きくなない。時代は不明である。



第4図 七会村遺跡分布図

6. 四方とや城跡 小勝1970ほか 約6000m²

高田山西北麓の小高い山の上に位置しており、前述の二反田城跡と藤井川をはさんで向かい合う。現状は原野で一部畑地に利用されている。遺構は明らかではないが、俗に四方山とも呼ばれているところをみると中世の方形館址である可能性もある。時代は不明である。

7. 萩原屋敷跡 徳藏233ほか 約3000m²

高田山の西に連なる尾根上に位置しており、北側を藤井川が東流する。遺存状態がよく遺構が明瞭に確認できる。円形に堀がめぐり、土橋や櫓の跡等も確認できる。時代は不明である。

8. 戸倉館跡 省略

第2章 調査経緯

第1節 調査に至るまでの経過

七会村は学校施設の老朽化に伴い、その整備促進に努めてきました。そして、平成元年度に七会村立東小学校校舎の建設を着工し、平成2年3月竣工しました。

このような中で、もう一つの小学校である七会村立西小学校の校舎の建設の気運が高まり、平成2年6月14日建設委員会において七会村徳藏931番地に建設することが決定されました。

建設予定地は、周知遺跡（戸倉館跡）に所在しているので、造成工事前に発掘調査する必要性が発生しました。

これを受けて、教育委員会事務局は岩間町に発掘に関する事務運営と発掘現場の視察に行き、その実情について研修してきました。次いで、発掘調査について、村当局と協議を重ねた結果、発掘主体を教育委員会に置き、発掘調査主任には萩原義照先生にお願いすることになりました。

その後、調査を萩原義照先生にお願いしました。

平成2年6月26日、教育委員会事務局と萩原義照先生の間で、発掘調査についての細かな協議をし、今後の日程の打ち合せをしました。

その間、文化課・水戸教育事務所と協議を重ねました。また、数回、七会村文化財保護審議会議を開催し、発掘についての概要説明と協力を依頼し、下記のような取り組みをしました。

平成2年7月3日から7日……範囲確認調査実施

平成2年9月25日……………県内発掘現場視察研修実施

　　水戸市（白石遺跡）（埋蔵文化財整理センター）

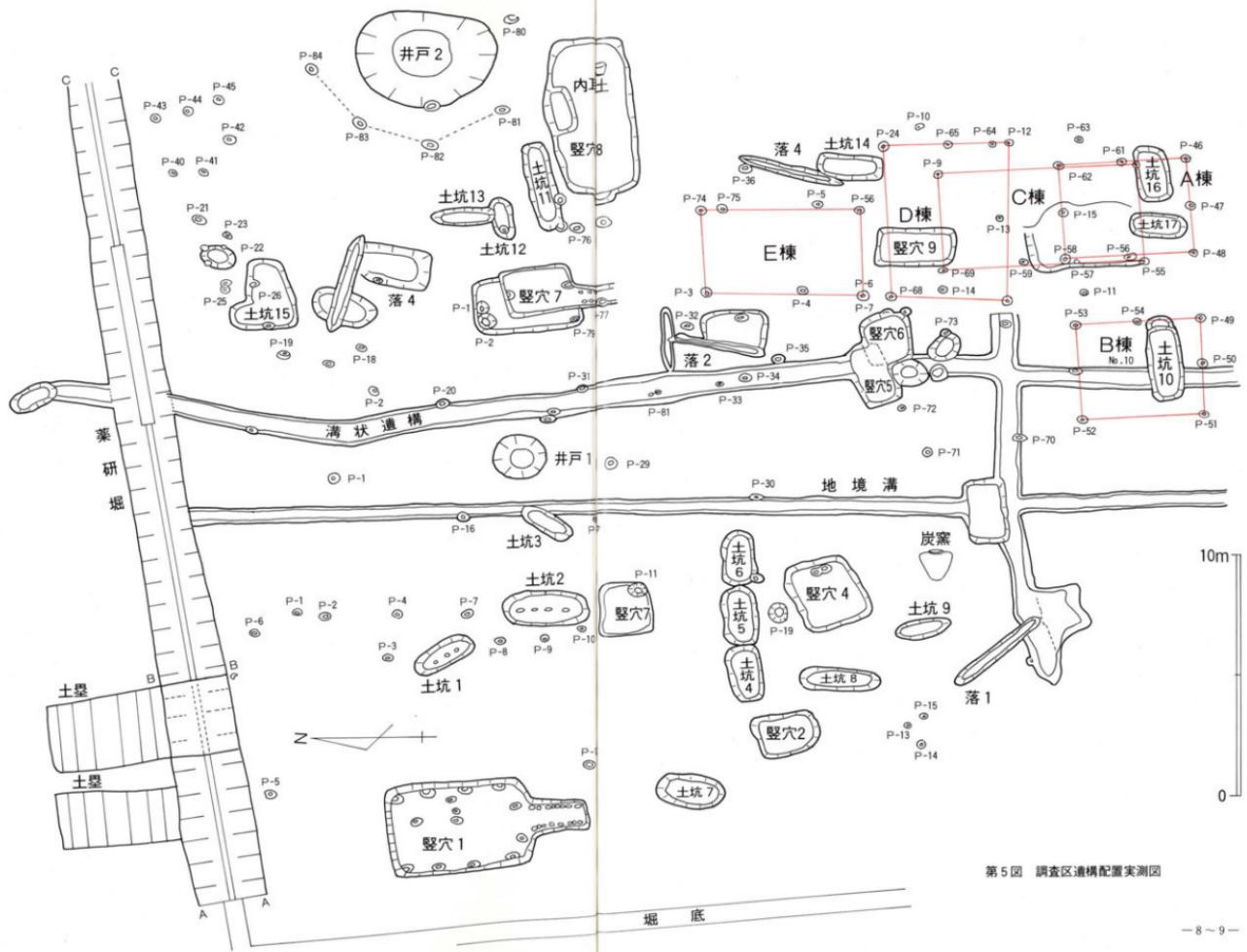
　　那珂湊市（沢田遺跡）

平成2年10月1日から7日……篠やぶ刈り払いと焼却

村から文化庁への届出については、平成2年9月1日付け、七教委発第248号で七会村長から文化庁長官宛に文化財保護法第57条の3第1項に基づく、埋蔵文化財発掘の通知を提出しました。

また、平成2年9月10日付け、七教委発第261号で七会村教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法第98条の2第1項に基づく、埋蔵文化財発掘調査の通知を提出しました。

そして、平成2年10月15日、戸倉館跡発掘現場において、関係者出席の下、起工式を挙行し、発掘調査を開始しました。



第5図 調査区構造配置実測図

第2節 調査経過

調査は平成2年10月15から12月3日まで行われた、その調査経過の概要（日記）はつぎのとおりである。

○ 10月15日（月） 晴れ

発掘調査開始、午前8時30分関係者現地集合、午前9時調査地清抜いと安全祈願。岩下村長・阿久津教育長、阿久津文審査委員長挨拶。調査主任挨拶と、補助員の紹介。

調査区A・Bを設定し、午前9時作業開始。地形測量・基準杭打ちを行なう。抜根・除土作業は、重機と手作業によって実施した。常滑焼の破片出土。

○ 10月16日（火） 晴れ

前日に続き、調査区の除土作業。B区重機利用、A区手作業で堀跡の確認作業を進める。B区南北に幅60cmの溝状の落ち込み確認。地形測量継続。

○ 10月17日（水） 晴れ

全調査区の除土作業。B区東西に溝状の落ち込み確認。A区籠抜根に重機を用い、除土作業を進める。

○ 10月18日（木） 曇り後晴れ

調査区の除土作業。遺構確認のため除土面の整地。調査区周辺の実測。A区東西に堀跡確認。午後七会中クラブ生徒、池田教諭の指導により、発掘作業参加。

○ 10月19日（金） 晴れ

B区の遺構確認作業。溝状の落ち込みの除土。重機によってA区の除土作業、土坑状遺構確認。



調査風景



調査風景



調査風景

○ 10月20日（土） 晴れ

遺構確認のため、除土面の整地作業掘跡内の除土、中世の壺・土鍋の破片・焼け石等多数出土。午後七会中クラブ生徒発掘参加、池田教諭指導

富田助役・富田村議会事務局長來訪

○ 10月21日（日） 晴れ

堀跡内の除土作業、内耳土器の破片出土
遺構確認のため、調査区の整地

○ 10月22日（月） 晴れ

堀跡内の除土作業、見事な葉研ぎが検出された。方形の堅穴状遺構・楕円状の土確認。南北線の堀跡（堀底）遺構を確認するため、A区西側畠地に調査区拡張。

幅30cm長さ約50mの堀底検出。

岩下村長・阿久津教育長・村議会議員発掘状況視察のため來訪。事務連絡、久下沼社教主事。

○ 10月23日（火） 晴れ

A区の堅穴状遺構（方約4m付張出し）落込み除土。堀跡内の除土。遺構実測。

○ 10月24日（水） 雨・作業中止

○ 10月25日（木） 晴れ

堀底跡確認のため、調査区拡張（重機導入）土壠の実測。堅穴遺構の掘下げ、確認面1m下床面・柱穴検出、ベルト西側床下から、鉄製品出土。

○ 10月26日（金） 雨・作業中止

○ 10月27日（土） 晴れ

各遺構の除土・掘下げ。調査区周辺の遺構確認のため試掘。



調査風景



調査風景



調査風景

- 10月28日（日） 晴れ

前日の作業継続。土層実測。堀跡の除土。

- 10月29日（月） 晴れ

各遺構のレベルと水糸張り。B区の落込み除土。午後阿久津教育長来訪。

- 10月30日（火） 曇り後晴れ

前日の作業継続。水戸教育事務所門井社教主事・同千種埋文指導員来訪。

午後雨のため作業中止。

- 10月31日（水） 曇

A区土坑の実測。B区の遺構落込み除土。昼休みを利用し、遺跡周辺の遺跡の分布状況調査。

境界溝（根切り溝）の除土。調査区隣接地の遺構確認調査。

- 11月1日（木） 晴れ

七会中クラブ生徒発掘作業参加。土坑実測。調査区隣接地の遺構確認調査。

- 11月2日（金） 晴れ

遺構内の整地と除土作業。遺構断面実測の水糸張り。

- 11月3日（土） 晴れ

文化の日 作業休み

- 11月4日（日） 雨作業中止

- 11月5日（月） 晴れ

土坑掘り込み。堀り断面図作製の水糸張り。

- 11月6日（火） 晴れ

堅穴遺構床面の鉄製品収納。堀り断面作製。桂村教育長・同事務局長来訪。

- 11月7日（水） 晴れ

各土坑の断面実測。調査区除土作業出土



調査風景



調査風景



調査風景

土器の整理。歴史館学芸第一課、瓦吹堅氏の指導要請連絡。

- 11月8日（木） 晴れ

堅穴遺構の実測。水戸市白石城跡発掘調査現地視察。笠間市史編さん室富田室長・長谷川主事来訪。前七会村教育長森氏来訪。

- 11月9日（金） 曇

B区東方へ調査区拡張。拡張面から堅穴遺構確認、内耳土器出土。笠間市委編さん室長・同係り・同市教委社教松江係長来訪。

- 11月10日（土） 雨・晴れ

各遺構の実測。出土品の整理・写真撮影。

- 11月11日（日） 晴れ

茨城県教育財団鯉渕主任調査員来訪。堅穴遺構の性格等について、指導助言をうく。ピット実測。岩下村長・議会事務局長来訪。

- 11月12日（月） 晴れ

御即位の礼・作業休み

- 11月13日（火） 晴れ

各遺構の除土・整地作業・調査区周辺の地形測量。出土品の整理。

- 11月14日（水） 晴れ 作業中止

- 11月15日（木） 晴れ 作業中止

- 11月16日（金） 晴れ

重機により拡張調査区の除土作業。出土品の整理。

- 11月17日（土） 晴れ

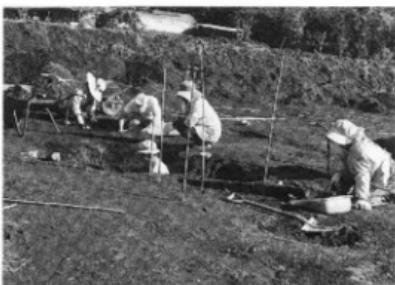
調査区の除土・整地作業。出土品の整理。写真撮影。

- 11月18日（日） 晴れ

七会村産業文化祭・作業休み



調査風景



調査風景



調査風景

- 11月19日（月） 曇後晴れ

遺構及び調査区の清掃と残土処理。出土品の整理。県歴史館瓦吹堅主任研究員來訪、指導助言を受ける。

- 11月20日（火） 雨・作業中止

- 11月21日（水） 曇後晴れ

各遺構の再確認と遺構NOの整理。竪穴遺構の床面清掃。写真撮影。

- 11月22日（木） 晴れ

拡張調査区（B区）柱穴内より古銭出土。残土処理。七会中クラブ生徒作業参加。笠間市史編さん室富田室長・長谷川主任來訪。

- 11月23日（金） 晴れ

勤労感謝の日 作業休み

- 11月24日（土） 晴れ

調査区及び遺構内の清掃。写真撮影

- 11月25日（日） 晴れ

拡張調査区の竪穴遺構（井戸状）内の除土作業。調査区内の清掃と整理。県教育財団斎藤主任調査員來訪。

- 11月26日（月） 曇

戸倉館跡の規模・範囲（襤張り）確認のため、地形調査と測量。写真撮影。富田助役來訪。

- 11月27日（火） 晴れ

堀立柱建物跡柱穴検出。筑波大学岩崎教授・同西野助教授來訪、指導助言を受ける。

- 11月28日（水） 雨作業中止

- 11月29日（木） 雨作業中止

- 11月30日（金） 雨作業中止

台風28号来襲による、大雨のため調査区各遺構内に泥土流入。



調査風景



調査風景



調査風景

○ 12月1日（土） 晴れ

現地説明会の資料作成。調査区内の清掃と整理。出土品の整理。

○ 12月2日（日） 晴れ

現地説明会

岩下村長・阿久津教育長・同事務局長・教委職員出席。

阿久津文審委員長・委員他村内外より多数來訪。反省会。

○ 12月3日（月） 晴れ

井戸状遺構について、堀底確認不可能のため、安全保持をかんがい埋め戻しする。

* 本日以降12月14日まで、調査整理期間とする。

イ 全調査区・遺構の実測

ロ 遺物の洗浄と実測

ハ 写真撮影

ニ 用器具の整理・事務所の清掃整理期

間中の見学來訪者

・12月5日 —— 筑波大生20名

・12月6日 —— 東小児童

・12月13日 —— 西小児童



調査風景



調査風景



調査風景

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

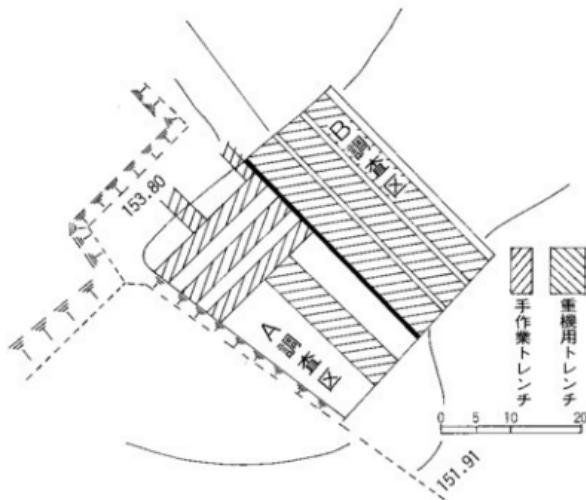
発掘調査区域は、七会村大字徳蔵831番地外に所在し、七会村立西小学校（旧徳蔵小）建設予定地の一部約1050坪の範囲で、茨城県遺跡台帳に「戸倉館跡」として登載された、周知の遺跡である。

調査に当って、調査区中央南北線の段差西側緩斜面（標高152～153m）の雑木・草等繁茂地をA調査区（以下A区）。段差東側の雑草地（標高152m）をB調査区（以下B区）とした。

先ず調査区内にトレンチを設定し、手作業に重機を併用して表土の除去を行い、遺構の確認を進めた。調査区全域に亘って表土を除去・整地してみると、表土下40～70cmのところの褐色土層面（地山）に、ピット状・方形・梢円形の落ち込みや、溝状などの黒色箇所が確認された。挿図図が示すように、本調査によって、検出された遺構としては次の通りである。

薬研堀跡・堀底跡・土塁・竪穴状遺構・土坑状遺構・井戸状遺構・掘立柱建物跡・溝状遺構・落とし穴状遺構・柱穴等である。

遺物としては、内耳土器各部破片・常滑系壺破片・カワラケ及び土師式破片・須恵器破片・と陶磁器破片・すり鉢破片・鉄製品・石製品及び少量の繩文土器片等である。



第6図 調査区トレンチ設定図（当初）

第2節 遺構について

1 堀跡について

本調査において、検出・調査した堀跡は2条である。この堀は城館跡に伴うものである。調査区は、戸倉館の外郭と想定されるので、いわゆる外堀に位置するものであろう。

(1) 1号堀跡

遺跡の全面調査でないので規模の詳細は不明だが、検出された1号堀跡は、確認面上幅2.5m・堀底幅約0.2m・深さ約3.5mである。長軸方向はN-80-Eを指し、ほぼ東西直線に掘られている。全長約36.7mに統一して調査区東へ12.2mの堀跡が確認（試掘）された。壁・底面ともロームで、壁は約45度傾斜し、その断面は、逆2等辺3角形をした見事な薬研堀である。

堀の一部溝状遺構との切り合い部の堀底に、段差7mほどあり、その部分は丁度箱堀薬研堀を呈している。これは当初土橋が構築されてあったところを、後掘込んだものであろう。また壁斜面のピットは、木橋の柱穴とも思われる所もあるが、その性格について不明である。

覆土については、下位にローム混茶褐色土が堆積し、中位に黒褐色土が堆積している。この下位・中位層は自然堆積である。内耳土器（土鍋）破片・常滑系大甕の破片は、中位の黒褐色土層から出土している。上位は黒色・茶褐色土が堆積している。この上位層は、後世人為的に埋め戻されたものである。

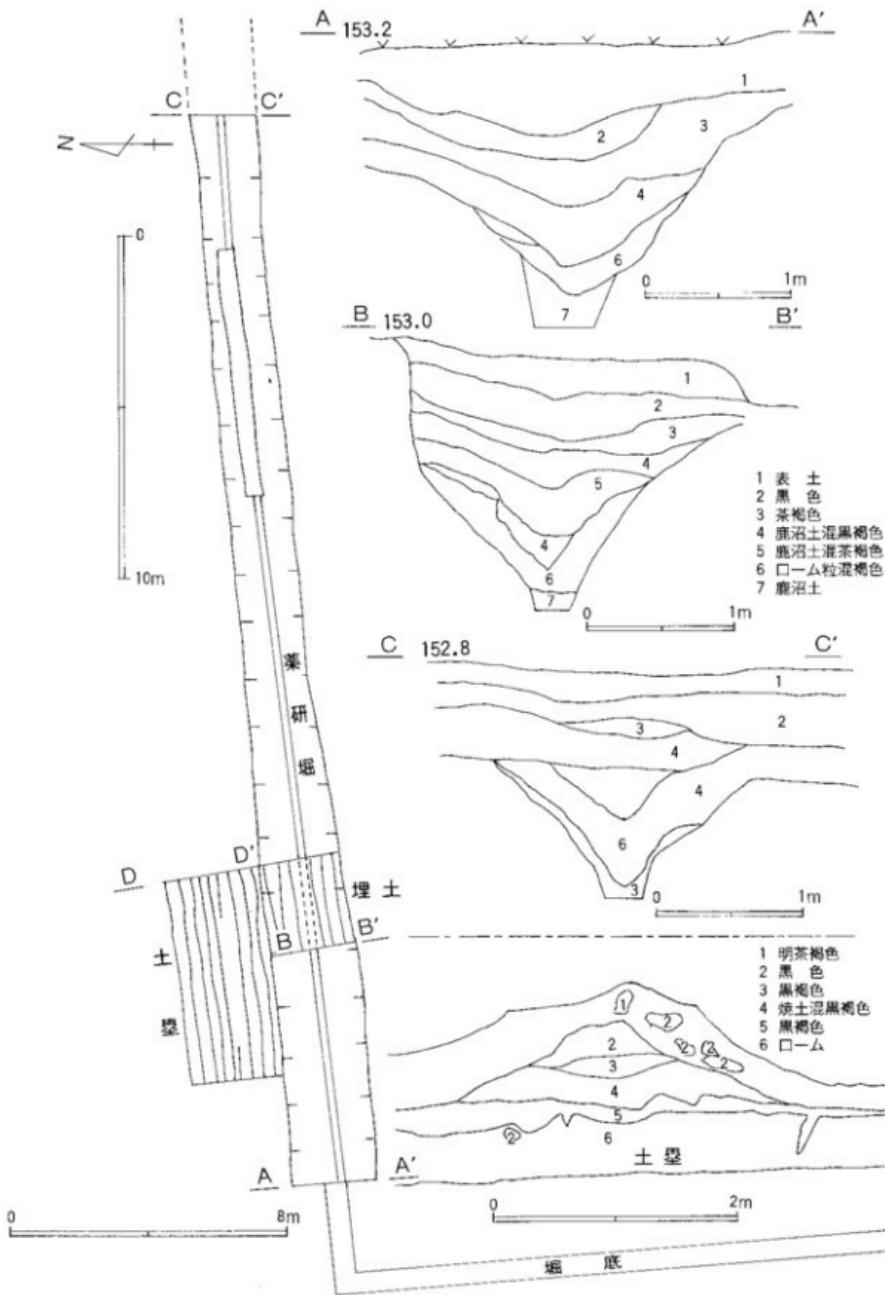
(2) 2号堀跡

本跡は、調査区外西側畠地から検出された堀跡である。地主や土地の人々の話によると戦前（太平洋戦争）に、この辺に大きな土塁が南北に在ったが、藤井川改修の際土取りによって、壊されたとの証言があった。土塁は消滅したが、関連の堀底の所在を確認・検出するため、証言をもとに、調査区を拡張し堀底の確認作業を進めた。果たせるかな、鹿沼土の落ち込みがローム面に、堀底幅0.3m・長さ49.5mが検出された。長軸方向N-5-Eを指し、南北線に走行して、1号堀跡に垂直L状に構築されたものである。

2 土塁について

A区北端東西線に約13mの土手が残存されてある。多分この走行線に沿って空堀が所在すると考え、調査した結果検出されたのが1号堀跡である。堀を掘り上げた土を利用して、構築したと思われる土塁は、調査区内にこの一部しか残っていない。他にも土塁の存在したことは考えられたが、現況は開発・土取りなどによって破壊されて、その遺構を見ることは出来ない。

さて現存する土塁の切断面を観察してみると、大体三角形を呈し、赤土（焼土か）と茶褐色土と・黒色土をもって構築されている。最下層のローム面は、つき固めたいわゆる叩き土居であろう。また焼土層がみられるのは、構築前野焼きしたとも考えられる。下層面の幅は約4m、高さ



第7図 堤跡実測図と土壟断面図

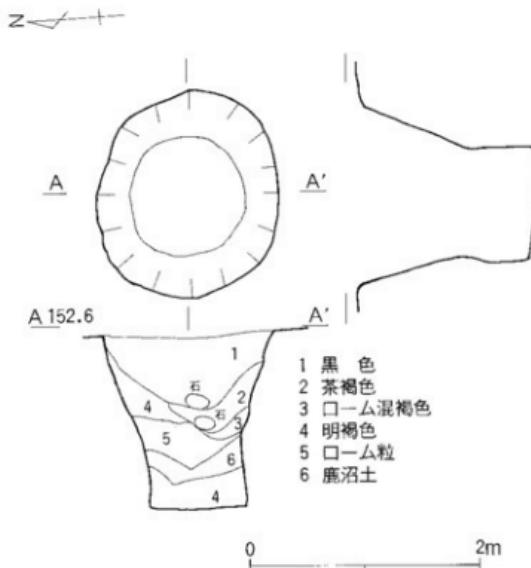
は削平されて約1.5mほどである。

3 井戸状遺構について

B区溝状の近くと、同じくB区東端（拡張調査区）に、円形の落ち込みが確認された。前者を1号井戸、後者の大規模円形遺構を、2号井戸として取り扱うこととした。両方とも調査前の段階では、全く埋没しており、ローム面を整地・清掃して確認・検出されたものである。

(1) 1号井戸

直径約1.8mの円形落ち込みが、すり鉢状に2m下がり、以下円筒状に約0.5mで底部面に達している。壁面は堅いローム層、底部近くに鹿沼土層が見られる。この遺構は、井戸を目的として掘込んだが、地下水位に至らないため、途中で放棄したものと考えられたが、一応井戸跡として取り扱った。遺物はカワラケ・土器小片・陶器破片・焼石・鉄製品等である。埋め戻しは一部人為的に、上部は自然堆積による暗黒色の腐植土である。



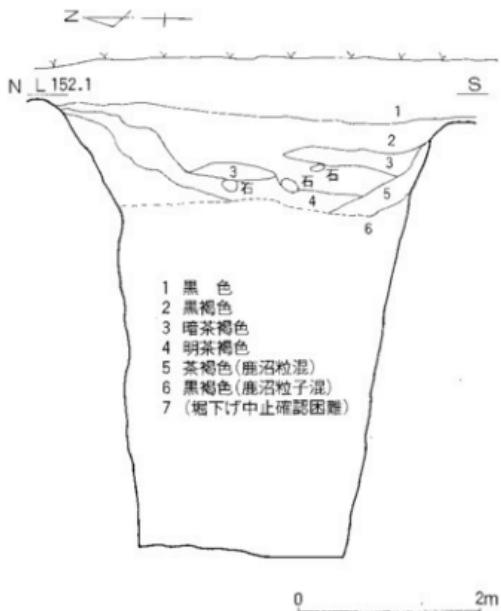
第8図 1号井戸実測図

(2) 2号井戸

B区東端に、大きな半円形の黒色落ち込みが確認されたので、調査区を格調して、直径1.5mの大円形の井戸状遺構を、掘り下げの除排土を行った。すり鉢状に地下約6mまで手作業で進めて、2m棒ステッキをさしたが、底部湧き水点までは達しなかった。更に掘り下げて除排土することも考えられたが、作業の安全性の不安と、危険防止の上から作業を中止し、周囲に安全柵を施設した。

この大井戸状遺構の、性格用途については不明の点が多いが、天水による溜井ではないかとも考えられた。たまたま、台風28号（11月30日）来襲に寄る大雨によって、径約5m深さ約6mの井戸状遺構内は満水状態になった。ちなみに減水状況を、一昼夜経って測定したが、水位わずかに5cm下がったのみである。これによって、この遺構の保水性高いことを知ることができた。この事は、今後遺構の性格解明の手掛かりの一つである。いずれにしても、用・貯水的なものとしての井戸跡であろう。

埋土遺物には、内耳土鍋破片・常滑の壺破片・すり鉢破片・石臼・砥石・焼石等である。埋め戻しは、人為的になされているが、上部土層は暗黒色の腐植土である。



第9図 2号井戸実測図

4 壺穴遺構について

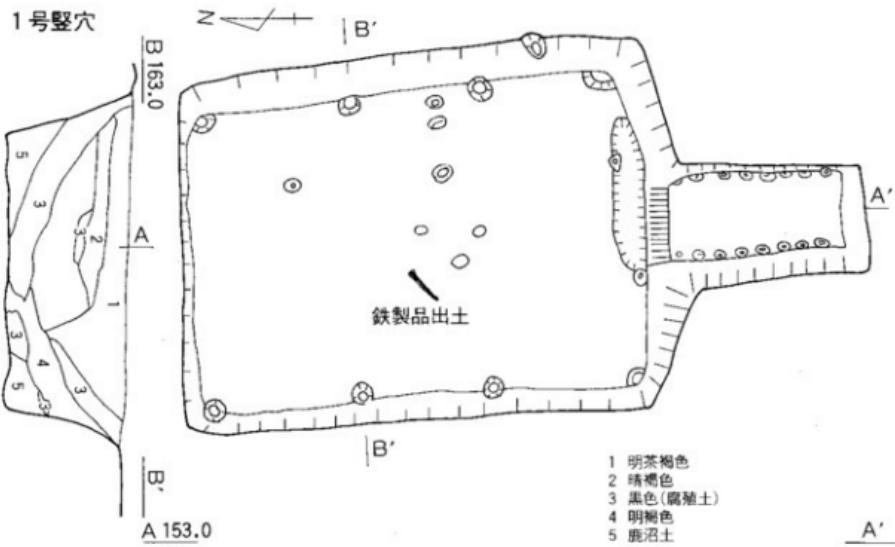
本調査中に検出された、壺穴とみられる遺構は9基である。それを形態別に分類してみると次のようになる。

- A——階段状の出入り口を持つ方形の壺穴遺構 (2基)
- B——舌状の張り出し部を持つ長方形の壺穴遺構 (1基)
- C——その他の壺穴遺構 (6基)

A・B・Cの分類は本調査に限ってのみで、定説的なものではない。その規模等については、実測図によって、大体把握することができると思うが、一応表にまとめてみた。

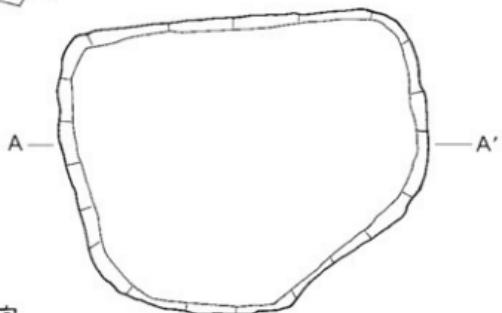
表2 ○ 形態別壺穴遺構

| 形態 | 主室部径 | 柱穴配置 | 特色・その他 |
|-----------|--|--|---|
| A NO 1 | m 4.50×3.25 13.35m ² | ・長辺壁面垂直に4本 対応 ・床面に補助P4 ・主室入り口部にP2 | ・階段状勾配20°・階段面側壁にP8 ・主軸方向N-0°-S・出入り口南中央 ・水糸レベル152.23・壁高1.5m ・遺物-鉄製品(短刀) |
| A NO 7 | 2.20×1.80 3.96m ² | ・中央軸線南北壁面垂直に2本 | ・階段状勾配30°・階段面側壁にP4 ・主軸方向N-O-S・出入り口南右側 ・水糸レベル151.80・壁高1.2m ・遺物-木炭粒東南隅床面 |
| B NO 8 | 6.00×2.20 13.20m ² | ・なし | ・主軸方向N-90-E ・舌状の張り出し部南壁中央 ・遺物-内耳土器・焼石・陶器破片 |
| C | 形態Cの分類遺構について、一応壺穴遺構としたが、土坑とも住居跡とも思われるが、その性格付けには問題もあるので、実測図を示すに止めた。 | | |



0 1 2m

Z ← +



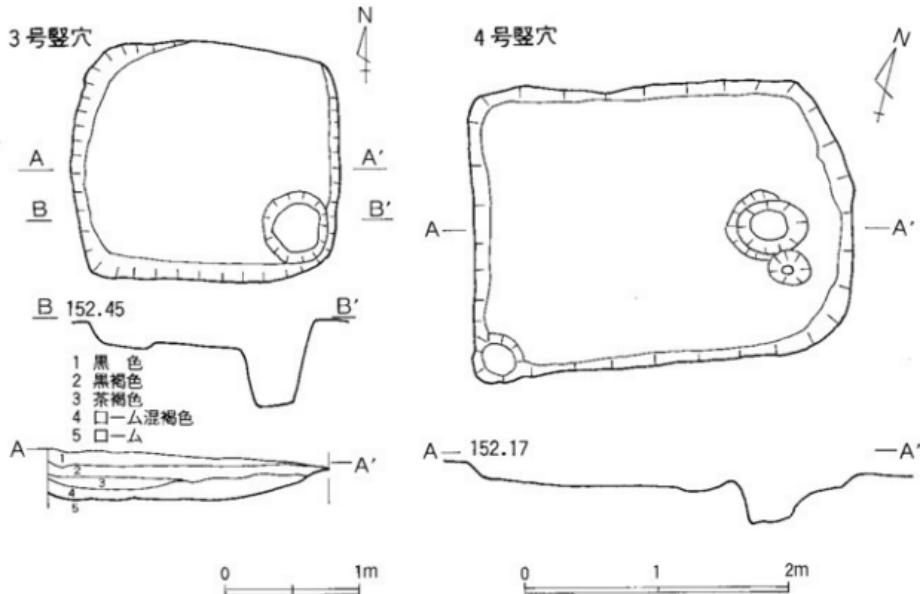
2号竪穴

A 152.57

A'

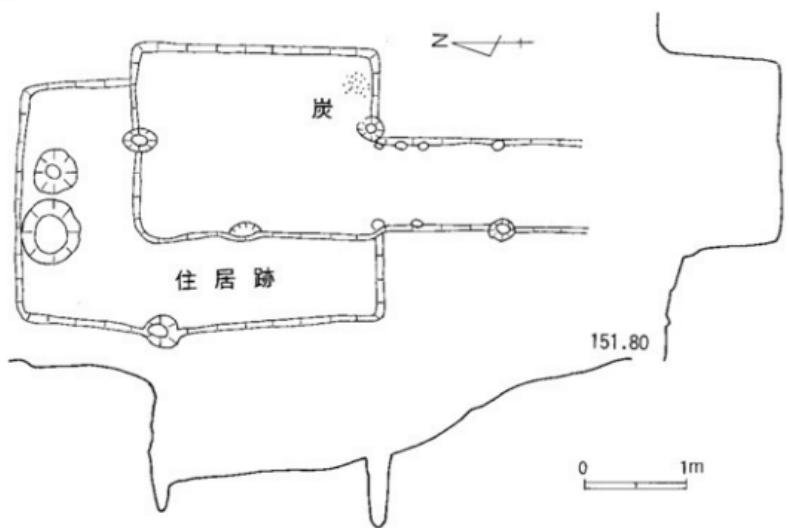
0 0.5 1m

第10図 竪穴遺構実測図

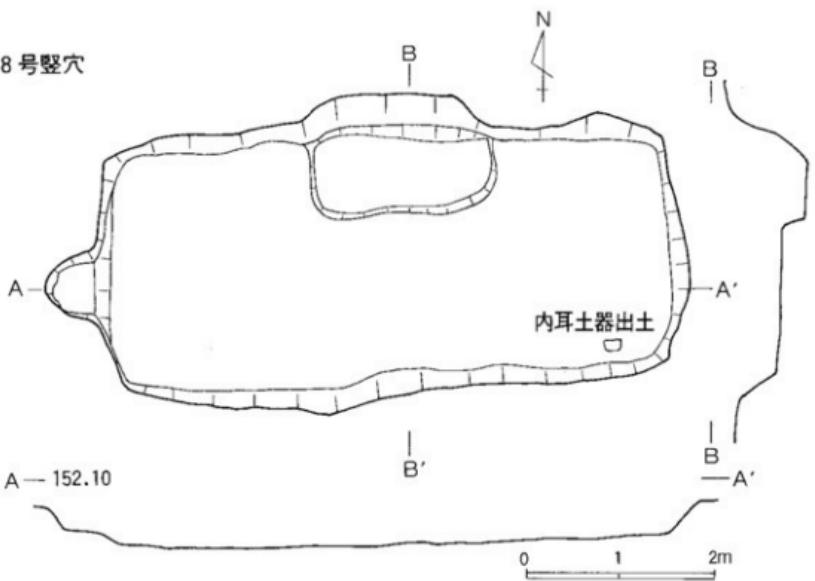


第11図 竪穴遺構実測図

7号竪穴



8号竪穴



第12図 竪穴遺構実測図

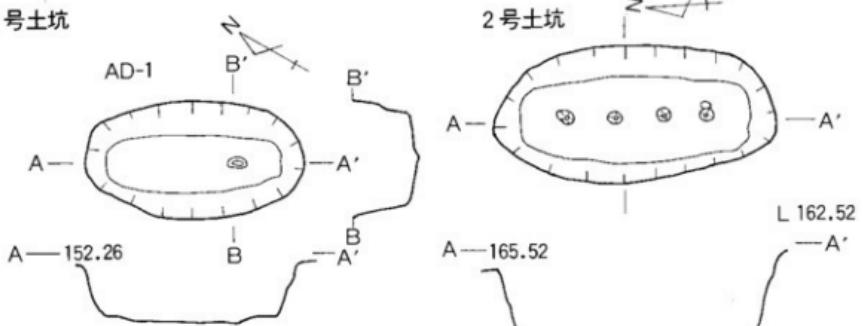
5 土坑について

本遺跡で調査・検出した多くの土坑について、その性格等を明確に位置付けることは困難である。土坑の平面形態は、楕円形・長方形を基本とし、長軸は大半が南北線にとられ、覆土は人為的に埋め戻されている。管見の限りでは、墓域に伴う中世の墓坑ではないかとも思われた。出土遺物は、カワラケ片・陶器片少々で、遺構の解明に直接結び付く、埋葬遺物は検出されなかったが、本調査においては、墓坑と考えられる土坑として取り扱った。

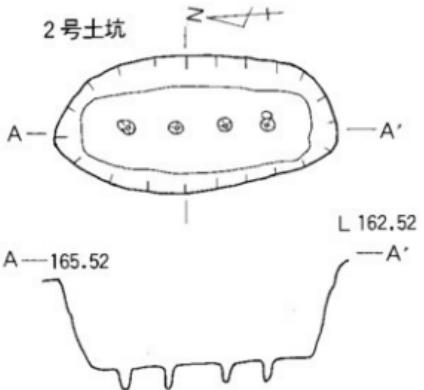
表3 O 土坑（墓坑と考えられる）一覧表

| 土坑番号 | 形状 (坑底) | 規模 長径×短径 (坑底) m | 深さ cm | 方向 | 水糸 レベル | 付記 |
|------|--------------|-------------------------|----------|--------|-----------|------------------------|
| 1 | 楕円形 (長方形) | 2.2×1.2 (1.7×0.6) | 60 | N-30-W | 152.26 | ・坑底平坦 ・P-1 |
| 2 | 楕円形 (長方形) | 2.8×1.4 (2.3×0.9) | 100 | N-0-S | 151.38 | ・坑底平坦 ・P-4 |
| 3 | 楕円形 (長方形) | 3.8×1.4 (3.3×0.8) | 120 | N-40-E | 152.60 | ・根切り溝と切り合い ・P-4 |
| 4 | 楕円形 (長方形) | 2.2×1.3 (1.8×1.1) | 70 | N-90-E | 152.60 | ・坑底凹凸 |
| 5 | 楕円形 (長方形) | 2.5×1.3 (1.9×0.9) | 50 | N-90-E | 152.60 | ・坑底凹凸 |
| 6 | 楕円形 (長方形) | 2.2×1.3 (1.9×1.1) | 40 | N-90-E | 152.60 | ・坑底凹凸 |
| 7 | 楕円形 (長方形) | 2.7×1.4 (1.6×0.6) | 50 | N-15-E | 152.23 | ・坑底平坦 ・P-4 |
| 8 | 楕円形 (長方形) | 2.2×1.2 (1.6×0.6) | 50 | N-0-S | 152.28 | ・坑底平坦 ・P-1 |
| 9 | 長方形 (長方形) | 1.9×0.9 (1.6×0.7) | 40 | N-0-S | 152.08 | ・壁面垂直 |
| 10 | 長方形 (長方形) | 2.7×1.0 (2.2×0.9) | 50 | N-0-S | 151.47 | ・坑底平坦 ・張り出し |
| 11 | 長方形 (長方形) | 3.7×0.8 (3.4×0.6) | 40 | N-80-E | 152.79 | ・坑底平坦 ・壁面垂直 |
| 12 | 長方形 (長方形) | 1.7×0.9 (1.5×0.5) | 20 | N-80-E | 152.06 | ・坑底平坦 ・壁面垂直 |
| 13 | 長方形 (長方形) | 1.84×0.7 (1.70×0.54) | 40 | N-0-S | 152.04 | |
| 14 | 長方形 (長方形) | 2.3×1.0 (1.9×0.8) | 70 | N-0-S | 151.52 | |
| 15 | 長方形 (長方形) | 2.8×1.1 (2.4×1.0) | 40 | N-90-E | | ・張り出し ・P-1 |
| 16 | 長方形 (長方形) | 2.2×1.0 (1.9×0.9) | 50 | N-90-E | 151.16 | ・坑底平坦 ・壁面垂直 ・P-1 |
| 17 | 長方形 (長方形) | 2.1×1.1 (1.6×0.9) | 30 | N-0-S | 152.24 | ・坑底凹凸 |
| 18 | 長方形 (長方形) | 2.6×13.0 (2.2×12.0) | 40 | N-0-S | 152.08 | |

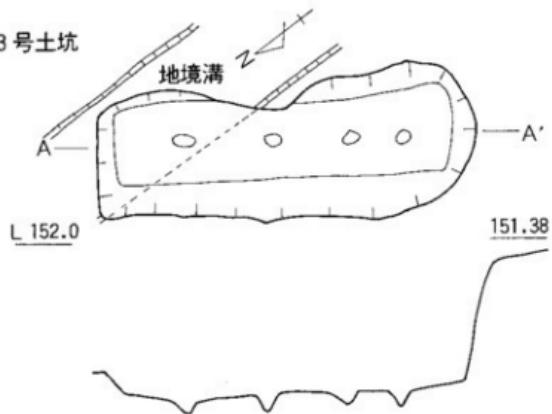
1号土坑



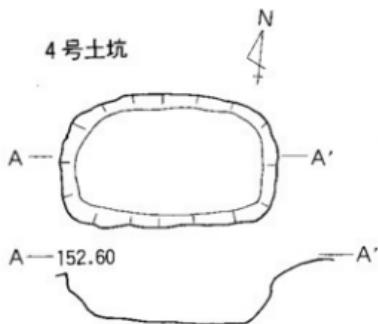
2号土坑



3号土坑



4号土坑

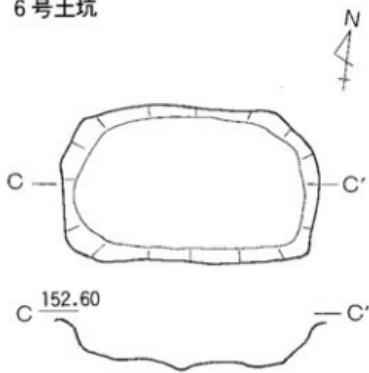


5号土坑

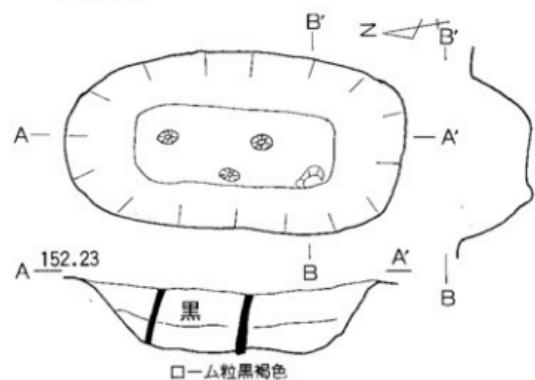


第13図 土坑実測図

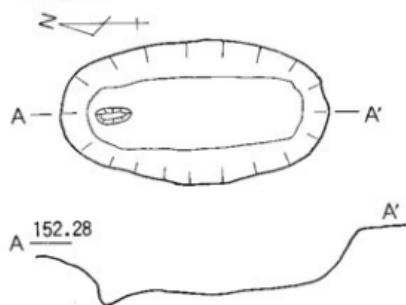
6号土坑



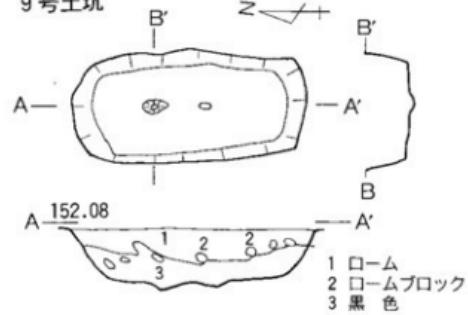
7号土坑



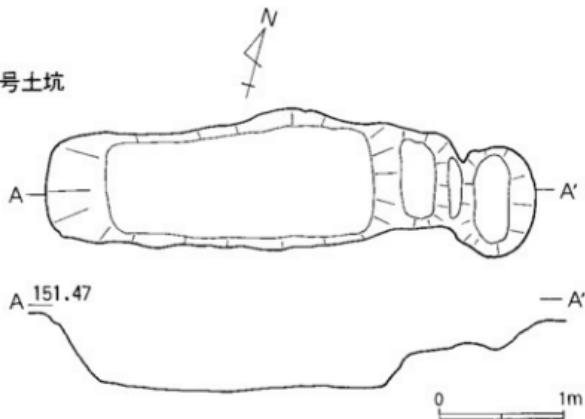
8号土坑



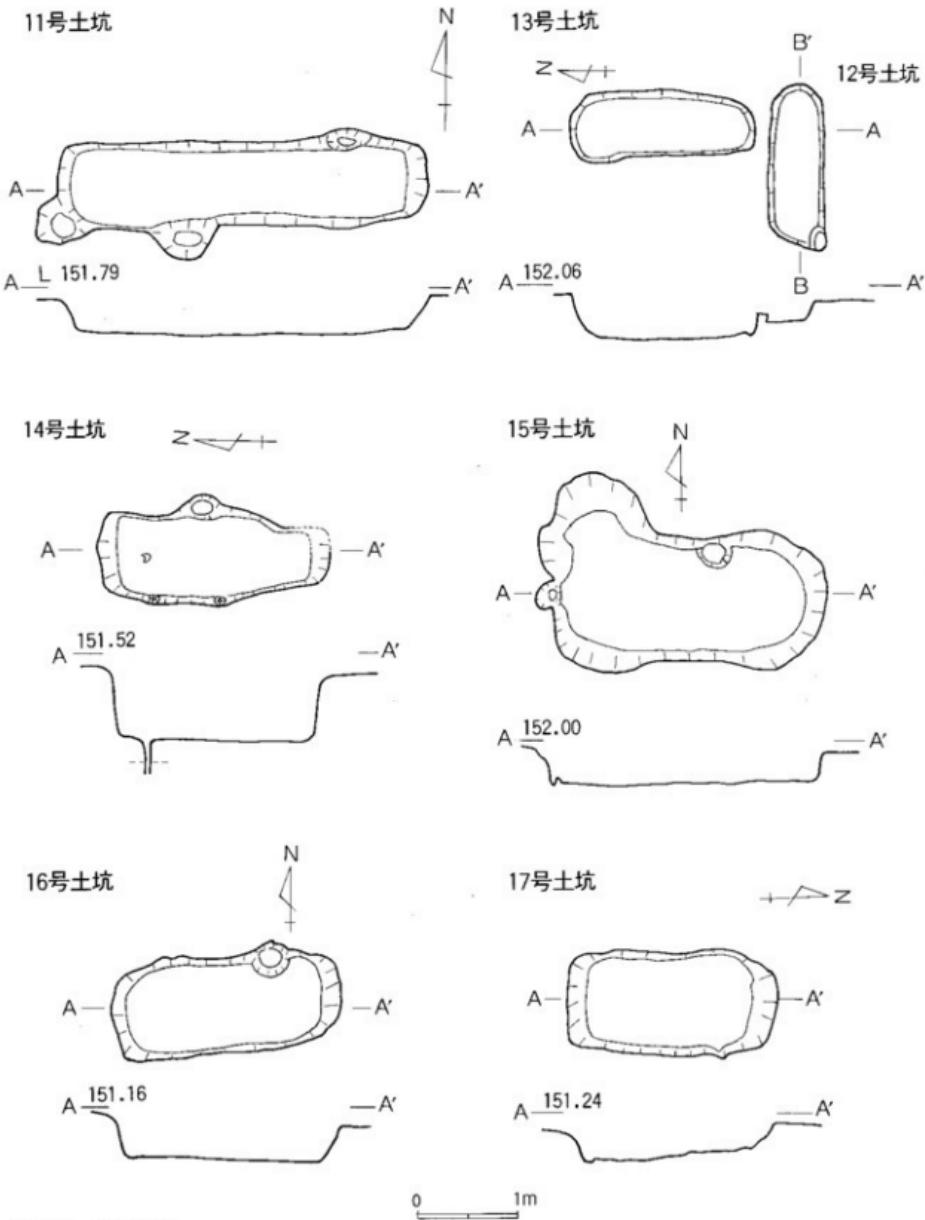
9号土坑



10号土坑



第14図 土坑実測図

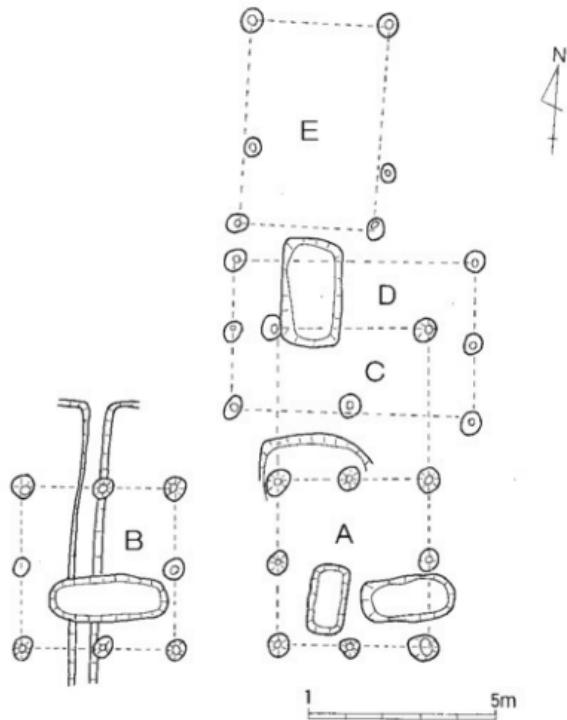


第15図 土坑実測図

6 挖立柱建物跡と柱穴群

本遺跡の調査区内から、多数の柱穴が検出された。そのほとんどが、B区の平坦部に集中している。柱穴から、古銭（洪武通宝）が埋土されて出土した。この事は、遺構の年代推定の一資料である。

検出された柱穴の中に、建物跡として、推定されるものは5棟であった。他にも建物跡として、まとまるものが所在すると思うが、その相互の位置はふくざつで、その1戸々々の対応関係を、つかむまでには至っていない。調査区を拡張することによっては、多くの建物跡が確認される可能性は考えられる。



第16図 挖立柱建物跡実測図

7 その他の遺構

(1) 溝状遺構

本遺構は、調査区のほぼ中央を1号溝が北から南へ走り、調査区の範囲内において、全長31m幅1m～1.2m深さ7cm～15cmほどが検出された。また溝の北端は薬研堀に切られ、溝が先行していることがわかる。

2号溝は、南端で1号溝及び地境溝（根切り溝）と垂直に交差して、東西に長さ17mが検出された。

(2) 地境溝

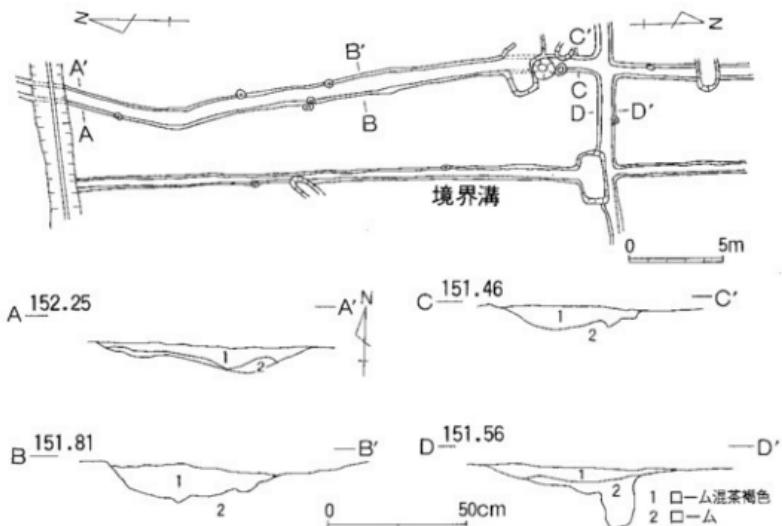
この溝は、1号溝に平行して幅50cm長さ35mで、2号溝を垂直に切って南北に掘られている。この溝は、根切り溝を兼ねた地境の溝と考えられ、近世以降のものである。

(3) 落とし穴状遺構

いわゆる獣捕獲用の、落とし穴ではないかともいわれているが、この遺構は規模が小さくその真のほどは分からぬ。

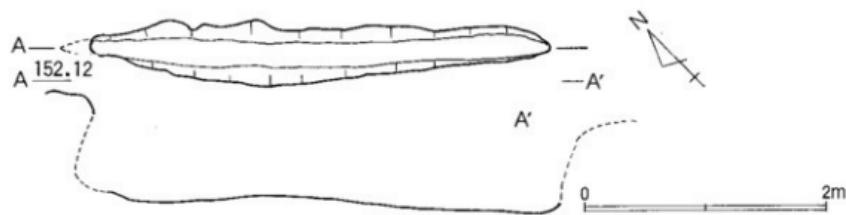
(4) 炭窯（すみがま）

近世以降の炭窯の床部が、A区溝状の近くに検出された。これは薪を炭火し炭に加工する、平窯に類似するものである。

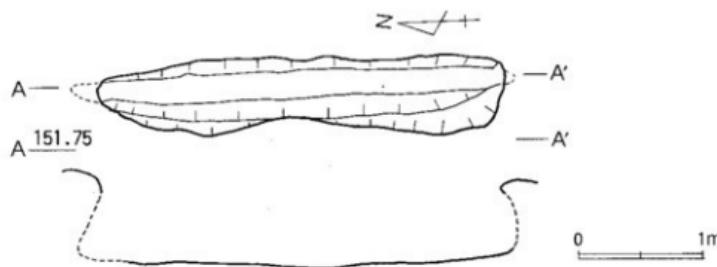


第17図 溝状遺構実測図

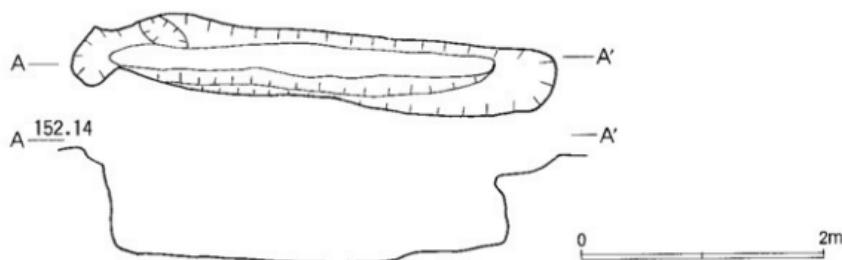
1号



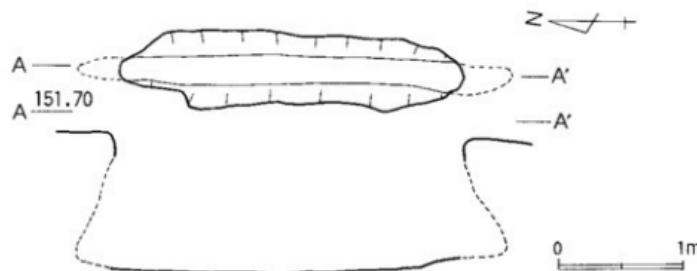
2号



3号



4号



第18図 落とし穴状遺構実測図

第3節 遺物について

今回出土した遺物は、調査区内の遺構や除土中に採集したものである。内耳土器・常滑焼きの破片・古瀬戸の破片・土師式・カワラケの破片・鉄製品・古銭・石製品等で・中世城館時代の遺物が主である。

1 陶磁器

本調査において、磁器が採集されたのは細片1点のみで、他は陶器の破片でいずれも接合出来ないものである。出土遺物の中で注目されるのは、古瀬戸天目の4点で、茶入れの口縁部と抹茶々碗のような破片で、黒の釉がかっている。室町初期のものであろう。また魚紋と蓮華弁様が彫りつけてある、古瀬戸の瓶子2点も破片であるが、釉の施された美しいものである。内耳土器は、復元可能1点で他は耳部15点・口縁部25点・体部63点・底部6点その他細片を入れると約120点数えられた。内耳土器片の外面は鍋墨で真っ黒に煤けており、相当使用されたことがわかる。その他土器の破片数10点が採集された。以上の出土品をみて中世土豪の生活程度や、時代の特色を見ることができる。

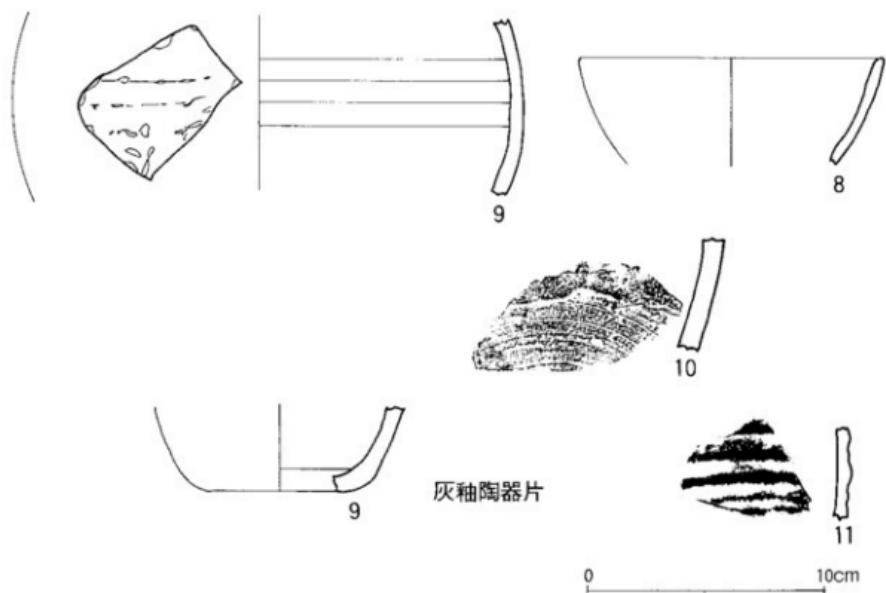
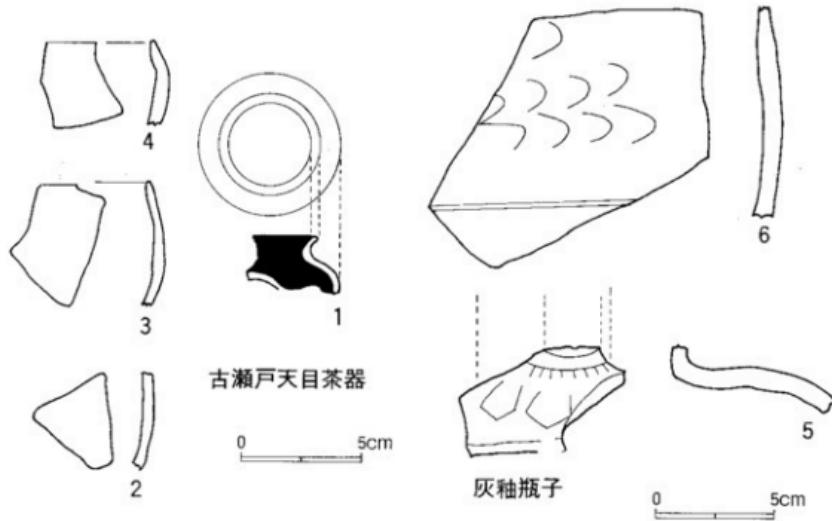
2 鉄（銅）製品

A区から検出された、階段状の出入り口を持つ堅穴遺構床面から出土した鉄刀は、本遺跡において貴重な遺物である。全長30cmの鉄刀については、短刀であるか、山刀であるのか不明である。その外鉄釘・鉄輪・楔状の鉄製品と鉄滓である。柱穴内から出土した古銭は、損傷しているが「洪武通宝」と読めた。中国明時代の貨幣で、洪武元年は西暦1368年で日本国南北朝時代に当たる。また不明銅製品1点が除土中採集された。

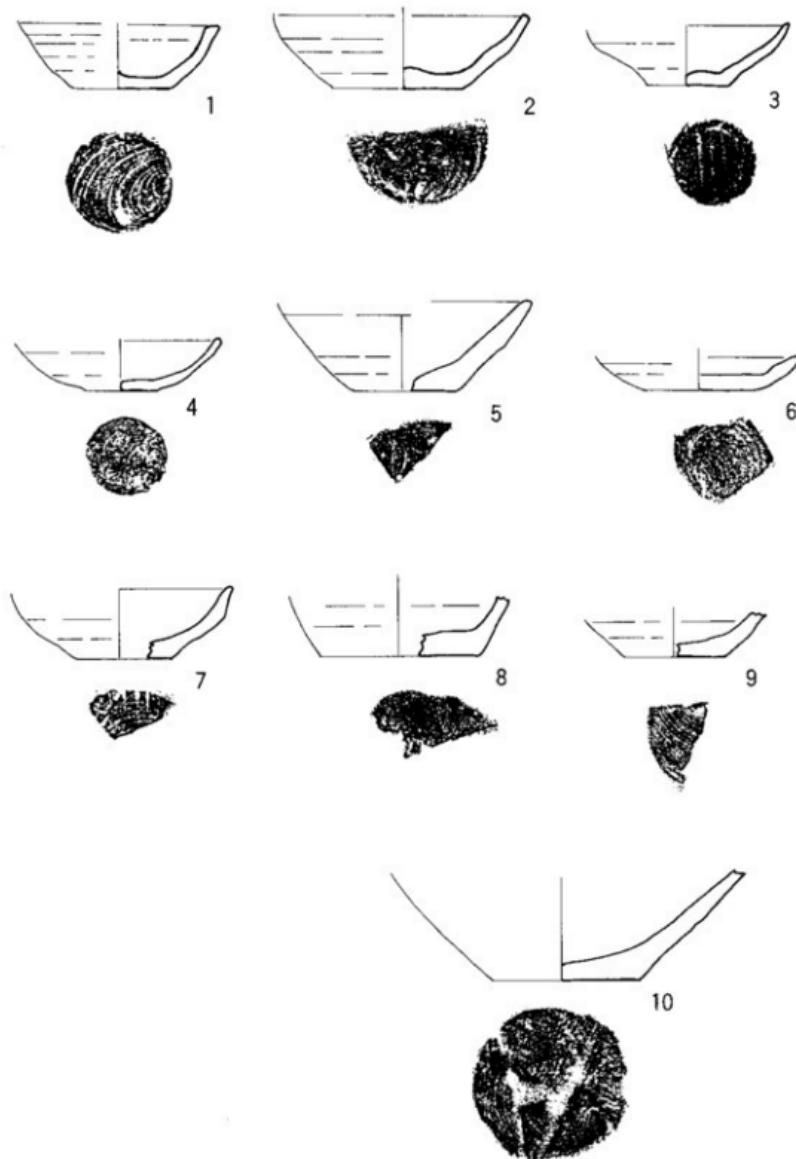
3 石製品

B区拡張面から検出された、井戸跡や堀跡内に埋土されて石臼・砥石等の石製品が出土した。これらは埋め戻しの際に、投げ捨てられたもので、完形品はない。器種別にみると、下臼片4点と、はんぎりと呼ばれる受け皿片2点。次に茶臼とみられる上下2点は、出土例の少ない貴重なものである。この事は天目茶碗（破片）出土と併せて興味がある。材質は安山岩である。

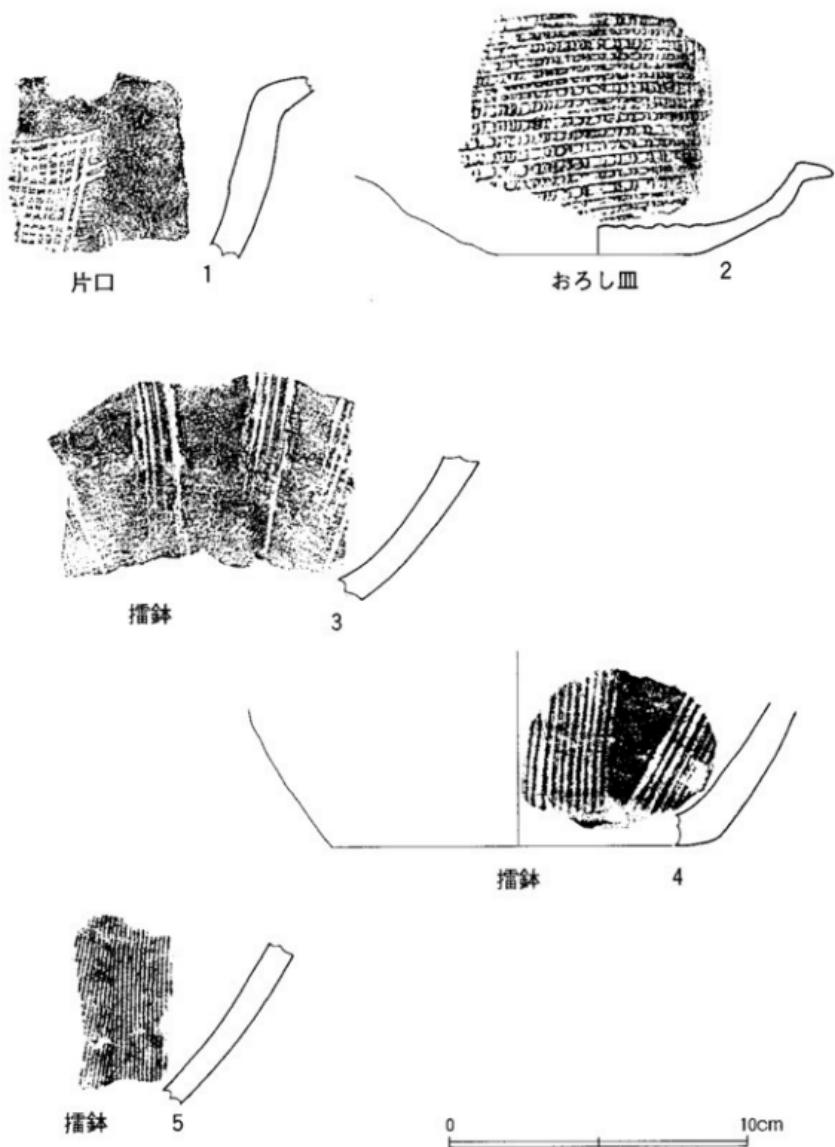
砥石片は3点であったが、2点は接合できた。どちらでも研磨条痕のある砂岩製の荒砥である。



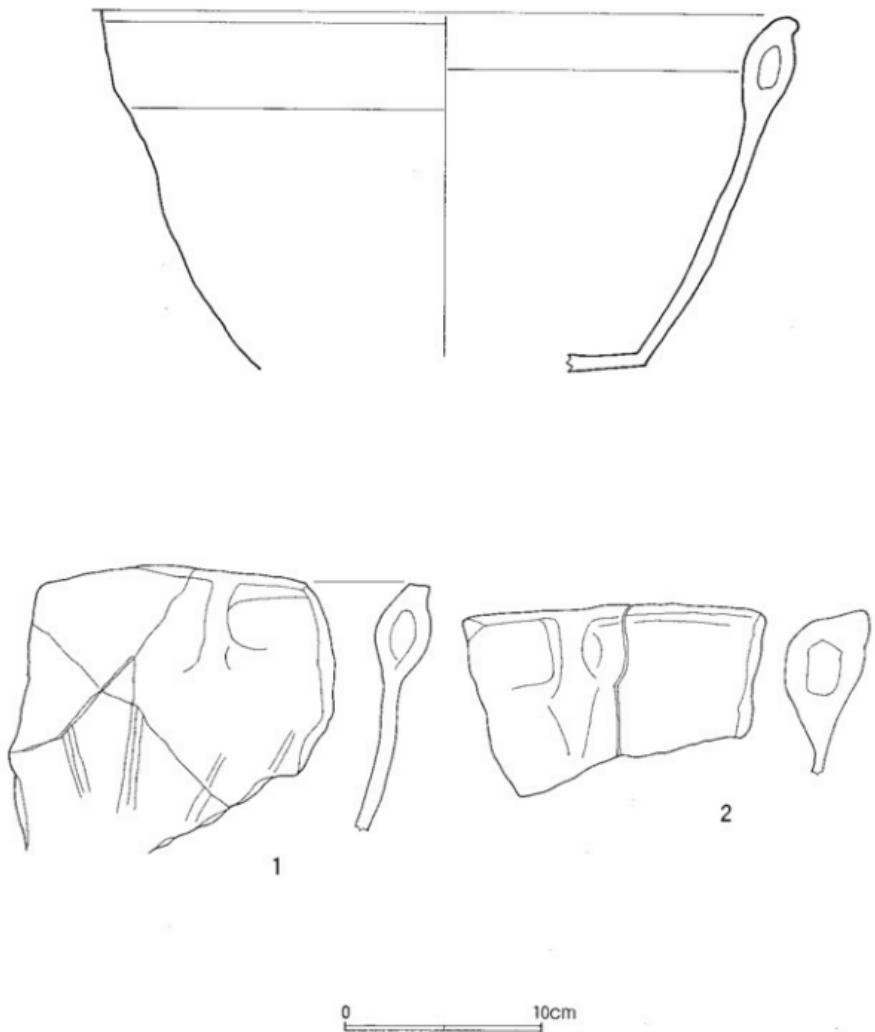
第19圖 灰釉陶器片實測圖



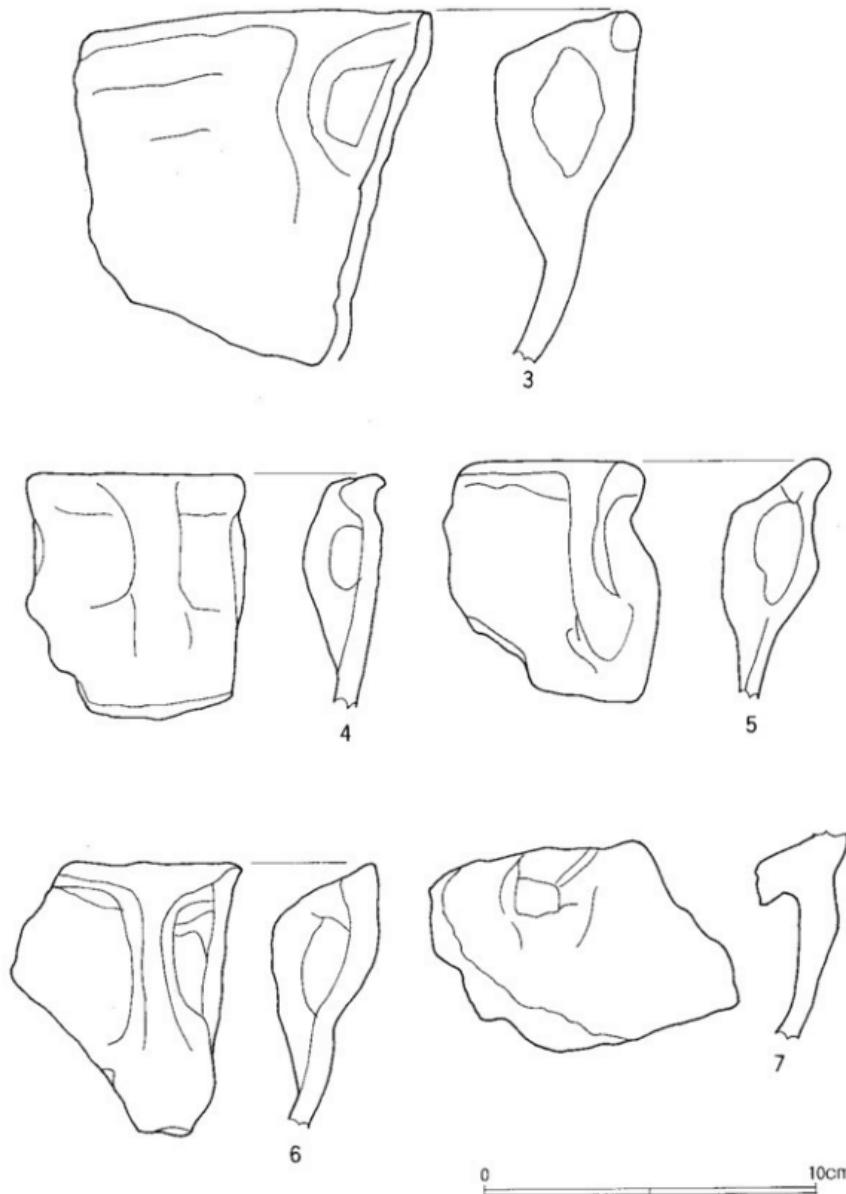
第20図 カワラケ実測図



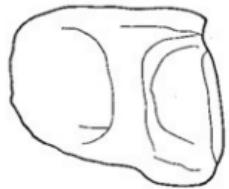
21図 片口・おろし皿・擂鉢片実測図



第22図 内耳土器実測図



第23図 内耳土器実測図



8



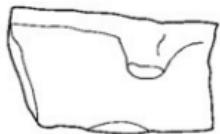
9



10



11



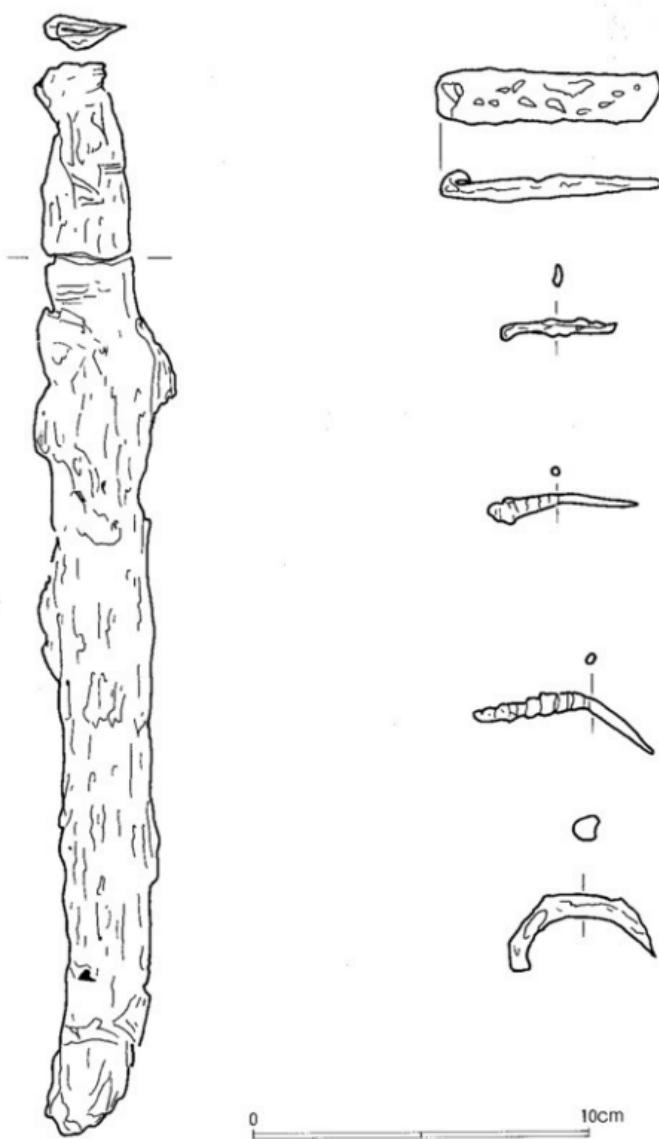
12



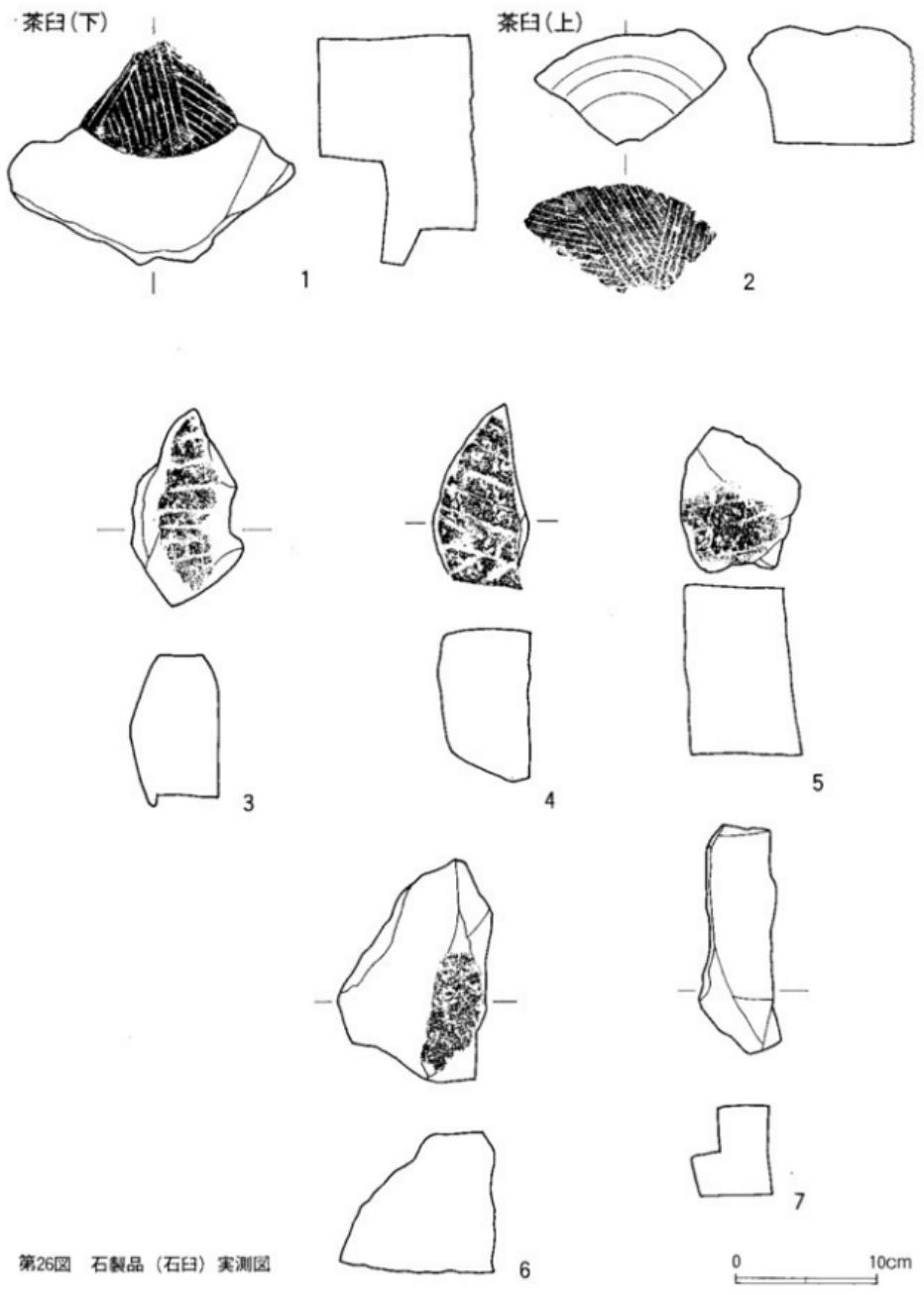
13



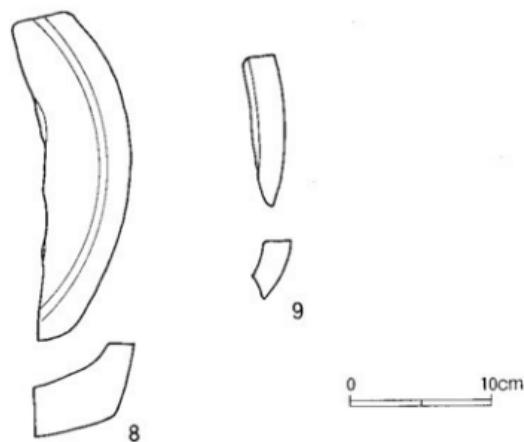
第24図 内耳土器実測図



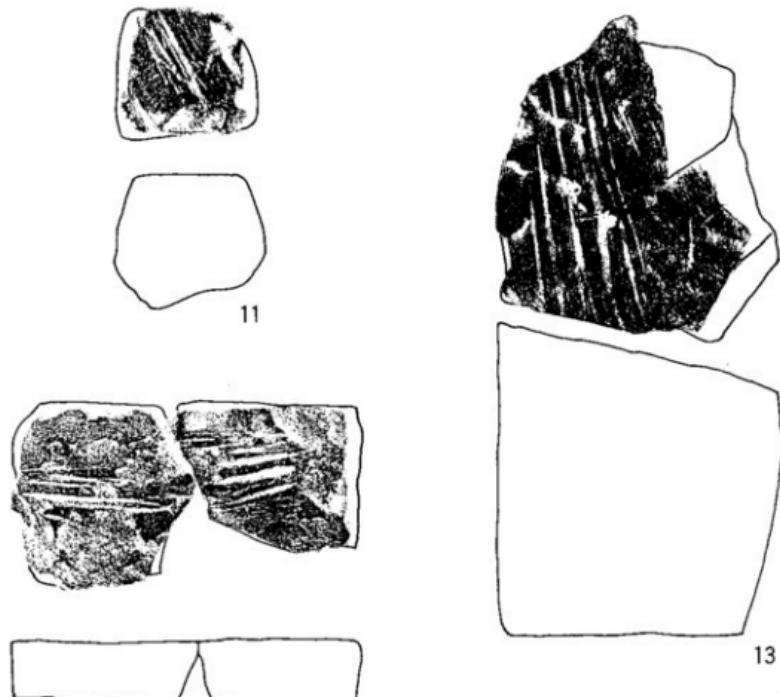
第25図 鉄製品実測図



第26図 石製品（石臼）実測図

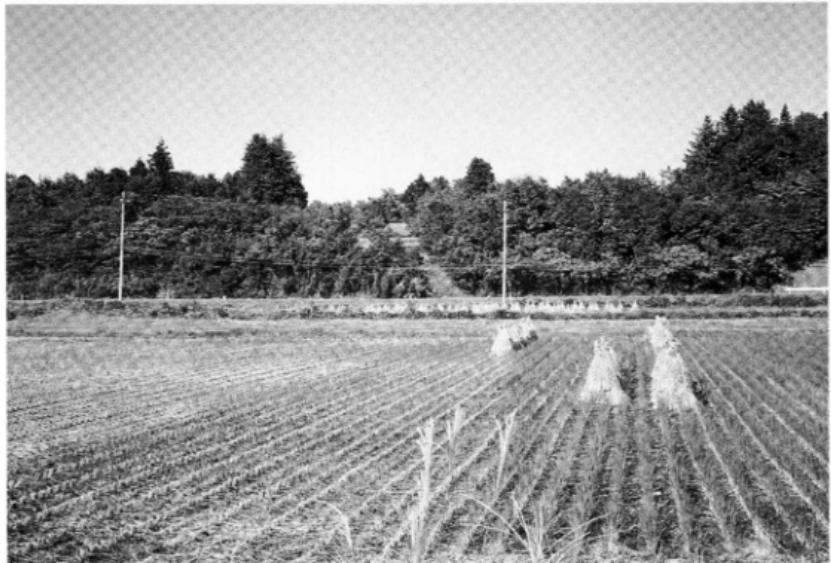


第27図 石製品（石臼）実測図

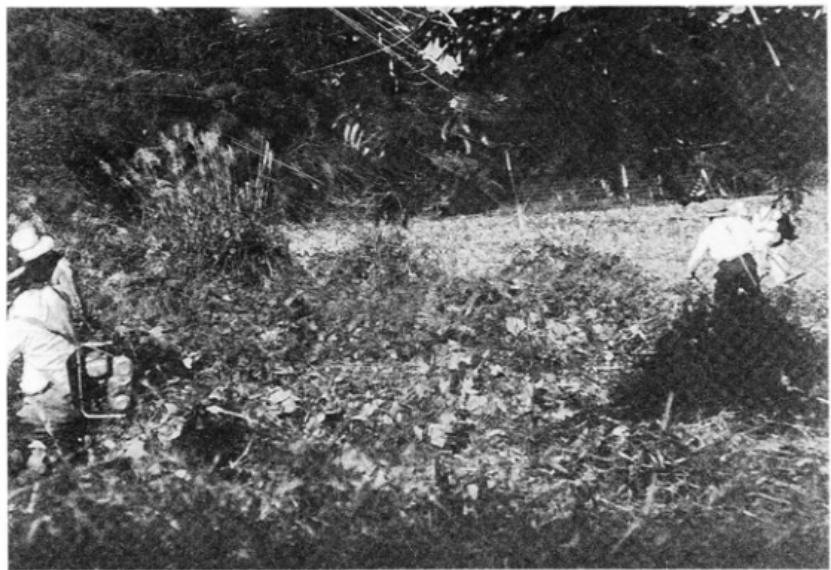


第28図 石製品（砥石）

図版



図版1 戸倉館跡遠景



図版2 調査前の伐開



図版3 調査区遺構(空影)

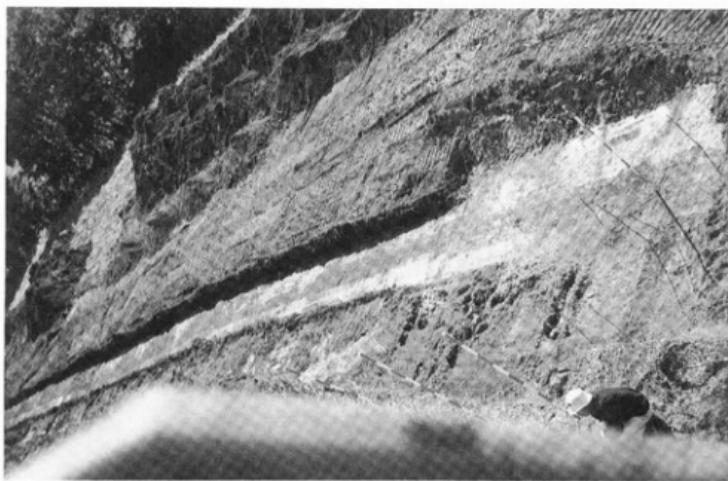


図版4 遺構検出状況

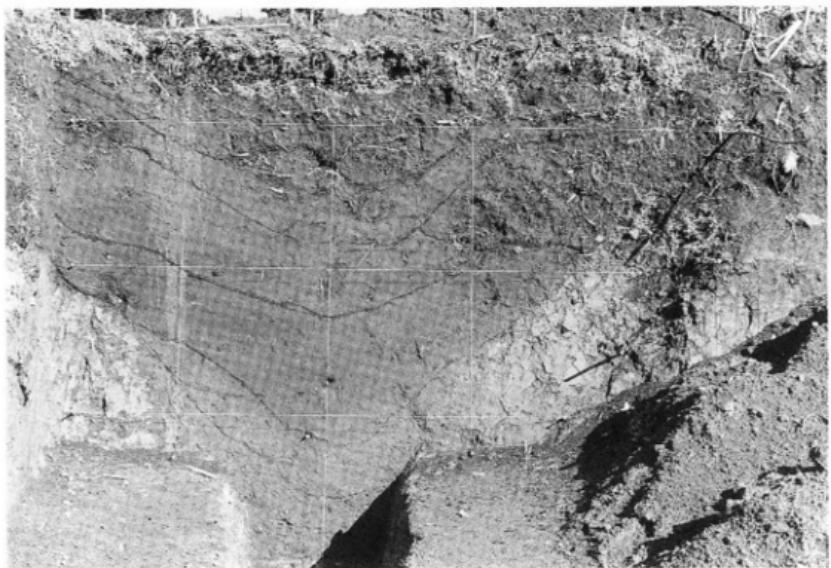
堀跡と土壙



図版 5 1号堀跡（業研堀）



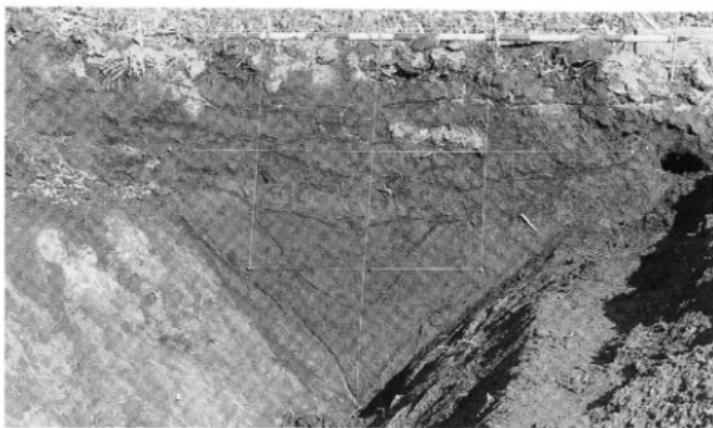
版 6 2号堀跡（堀底跡）



図版7 堀跡（A-A'）土層



図版8 堀跡（B-B'）土層



図版9 堀跡（C-C'）土層



図版10 土壘



図版11 土壘と堀跡

井戸

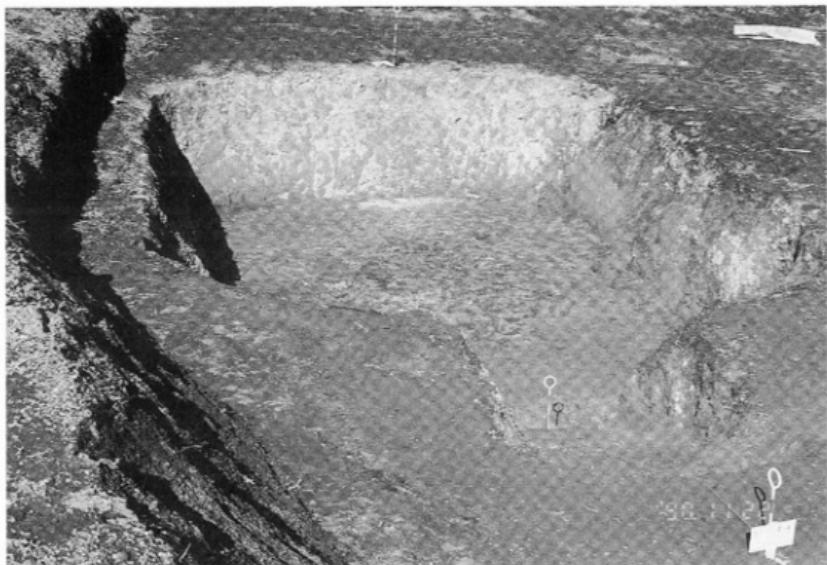


図版12 1号井戸



図版13 2号井戸

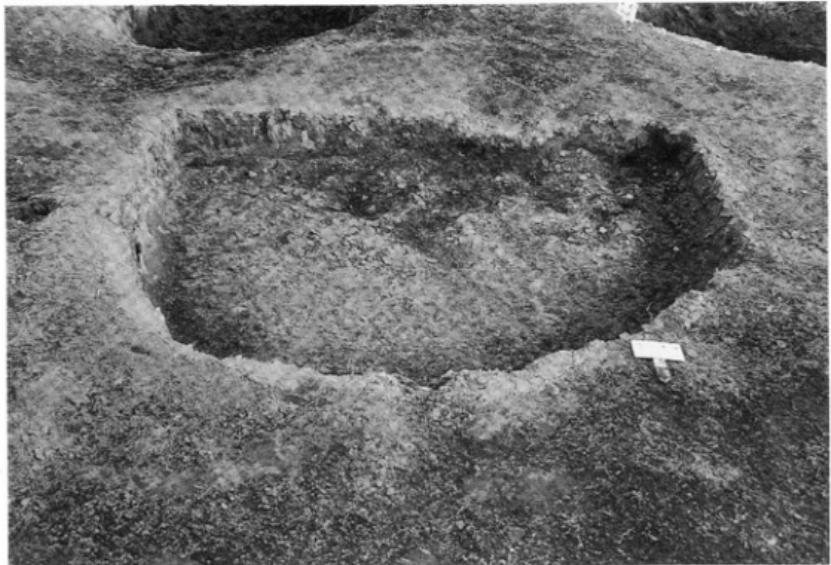
豎穴遺構



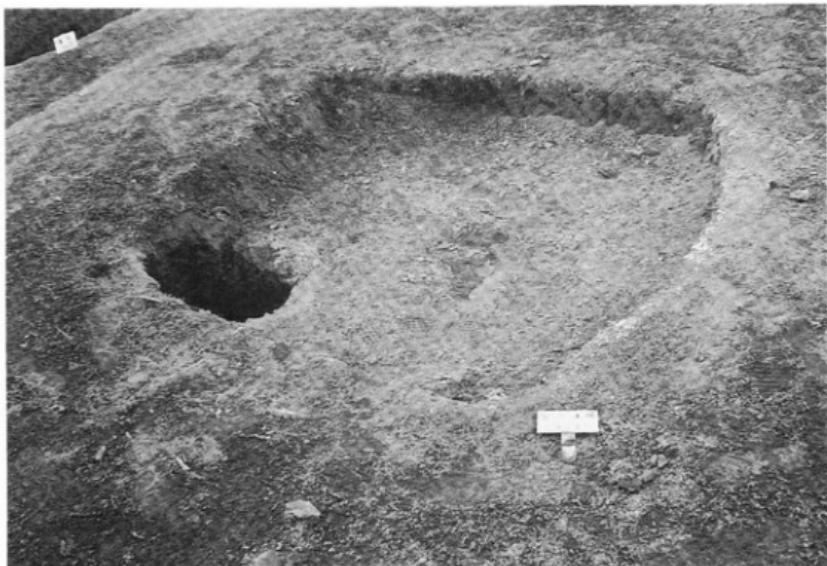
図版14 1号豎穴遺構(階段状の出入口部をもつ)



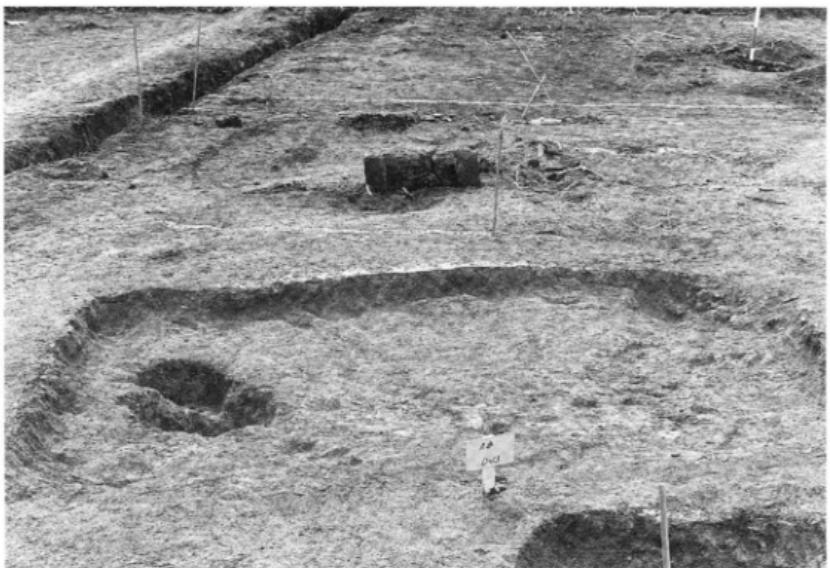
図版15 同上遺物出土状況



図版16 2号竪穴遺構



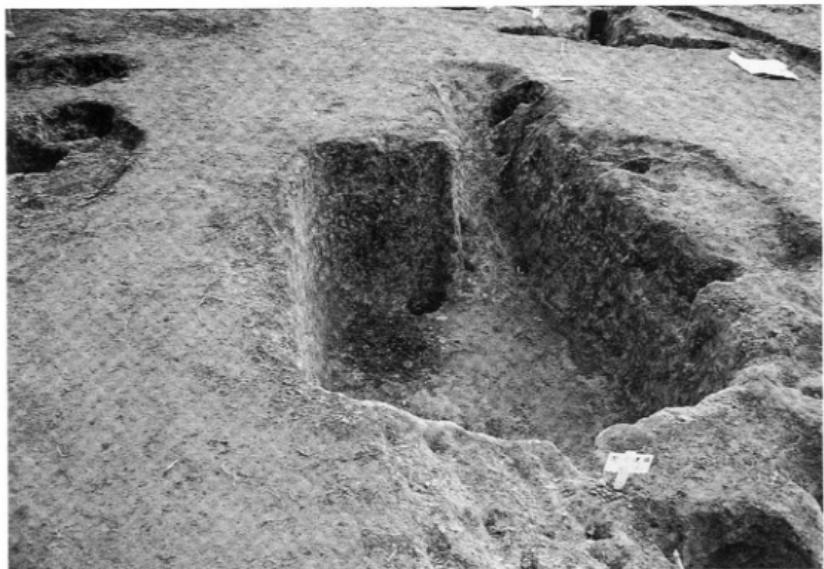
図版17 3号竪穴遺構



図版18 4号竪穴遺構



図版19 5—6号竪穴遺構



図版20 7号竪穴遺構(階段状の出入口部をもつ)

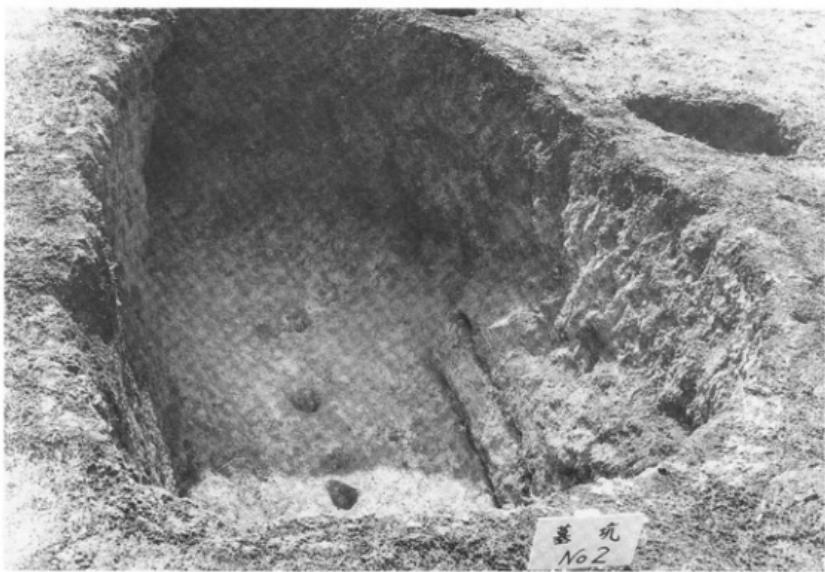


図版21 8号竪穴遺構

土 坑



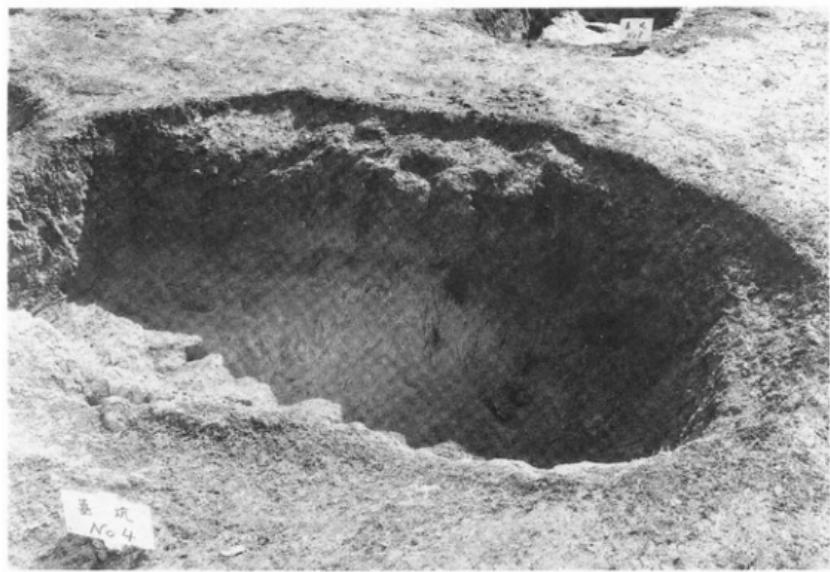
圖版22 1號土坑



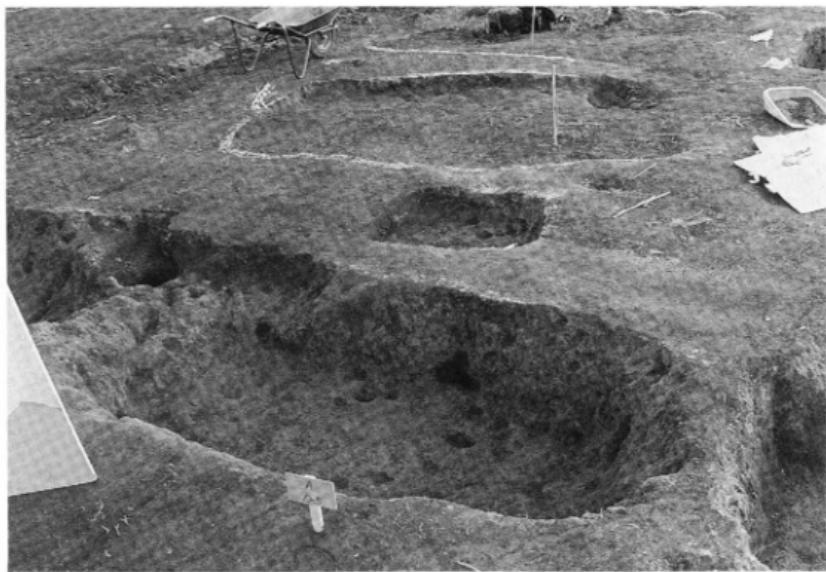
圖版23 2號土坑



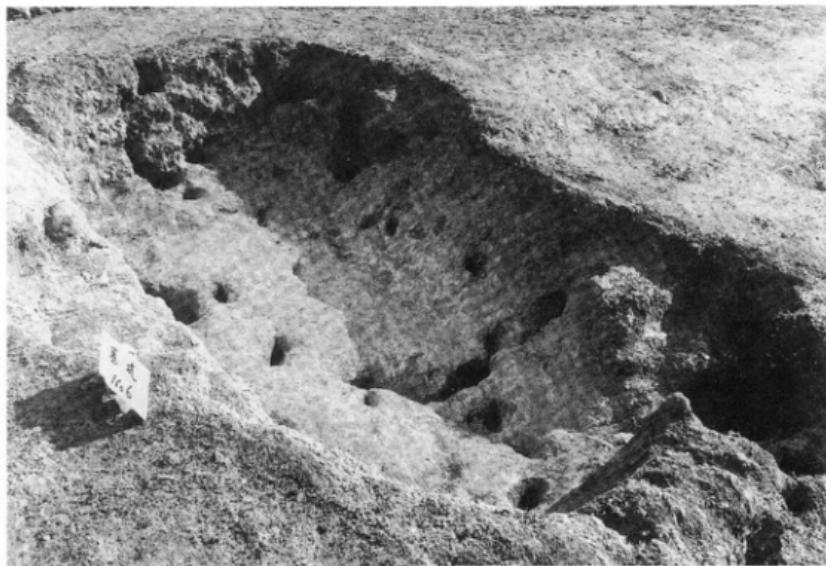
图版24 3号土坑



图版25 4号土坑



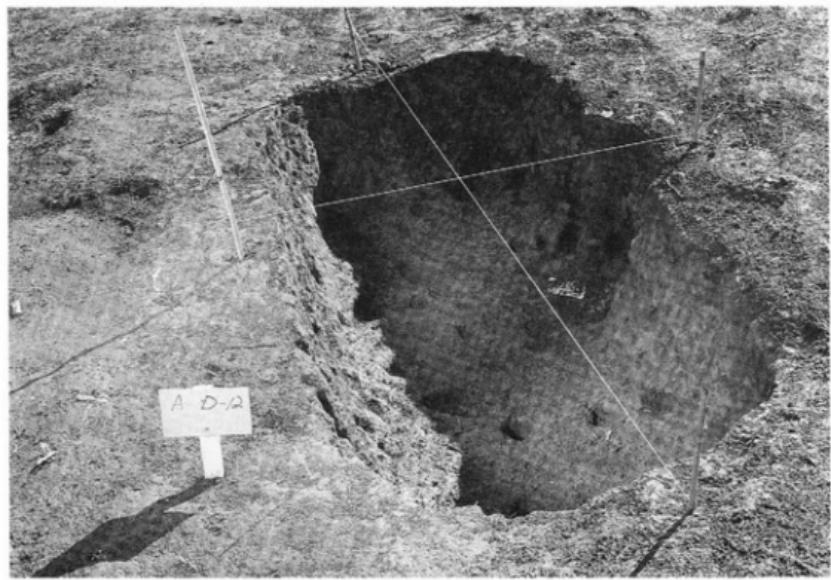
図版26 5号土坑



図版27 6号土坑



图版28 8号土坑



图版29 9号土坑



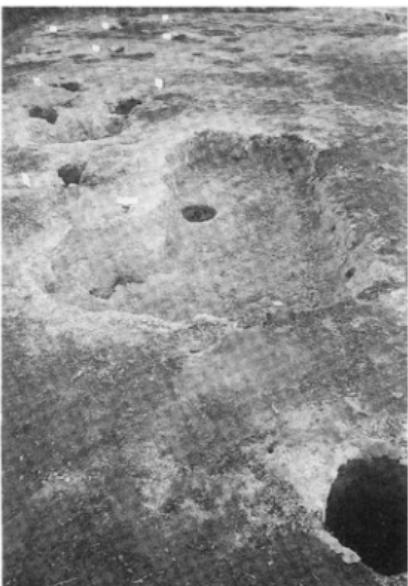
图版30 10号土坑



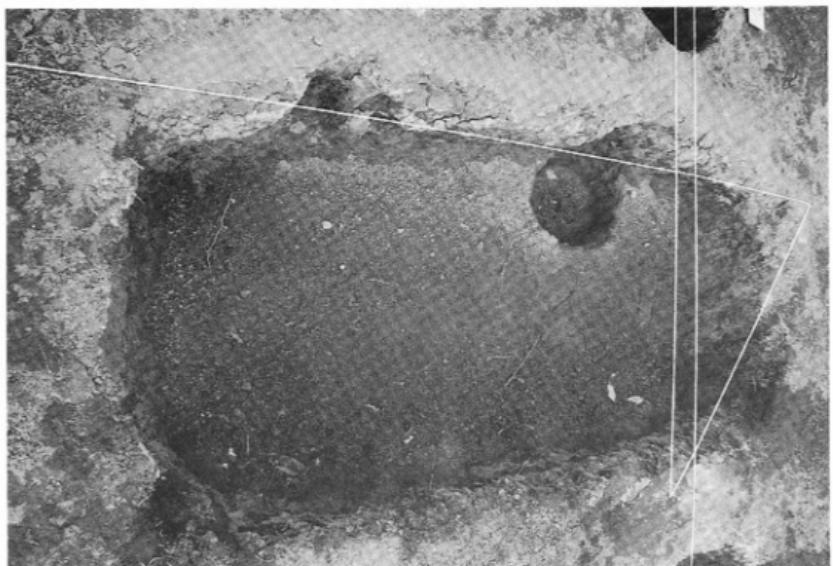
图版31 11号土坑



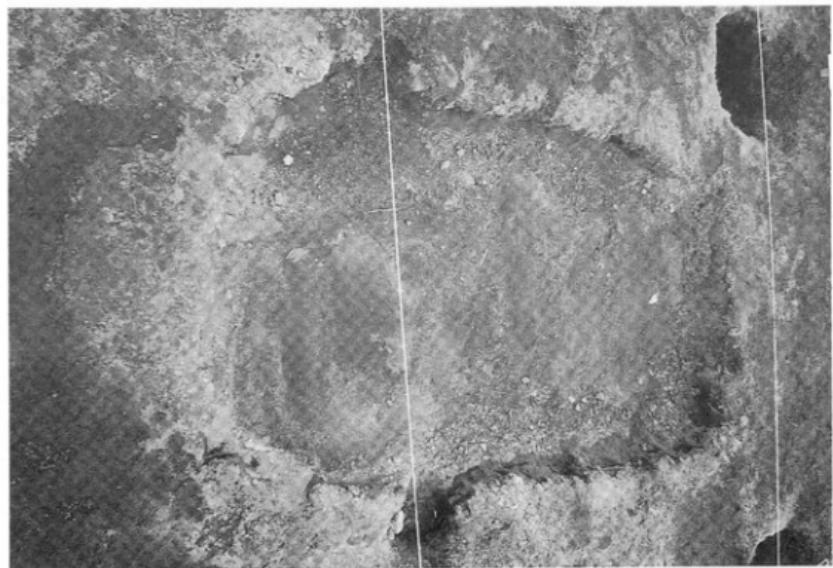
图版32 12号、13号土坑



图版33 14号土坑

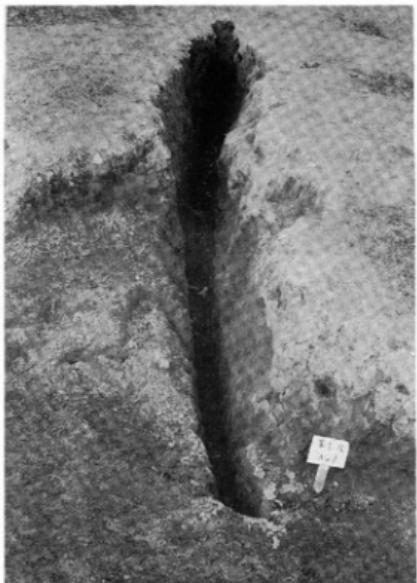


图版34 16号土坑



图版35 17号土坑

落とし穴状遺構



図版36 落とし穴状遺構 1号



図版37 落とし穴状遺構 2号

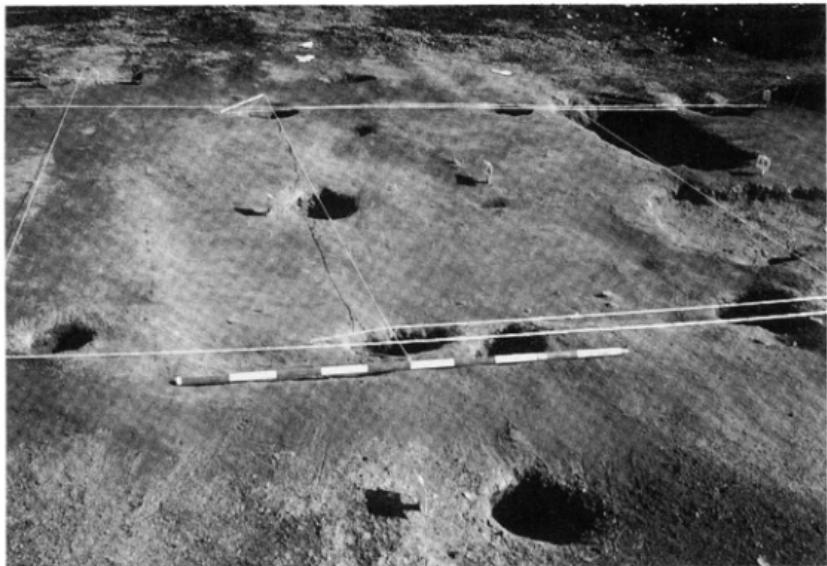


図版38 落とし穴状遺構 3号

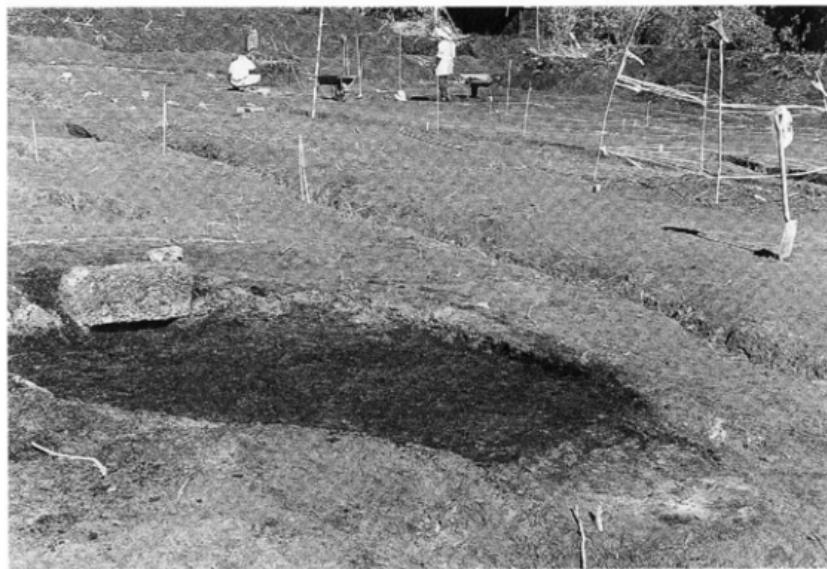


図版39 落とし穴状遺構 4号

その他遺構

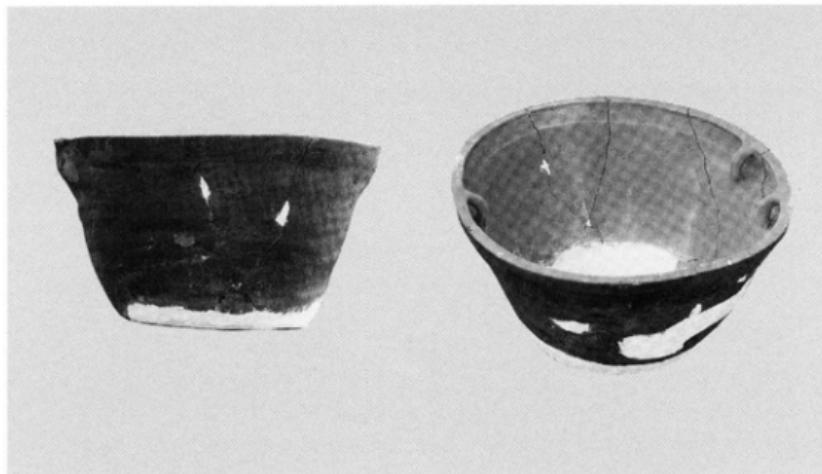


図版40 掘立柱建物跡（A棟）

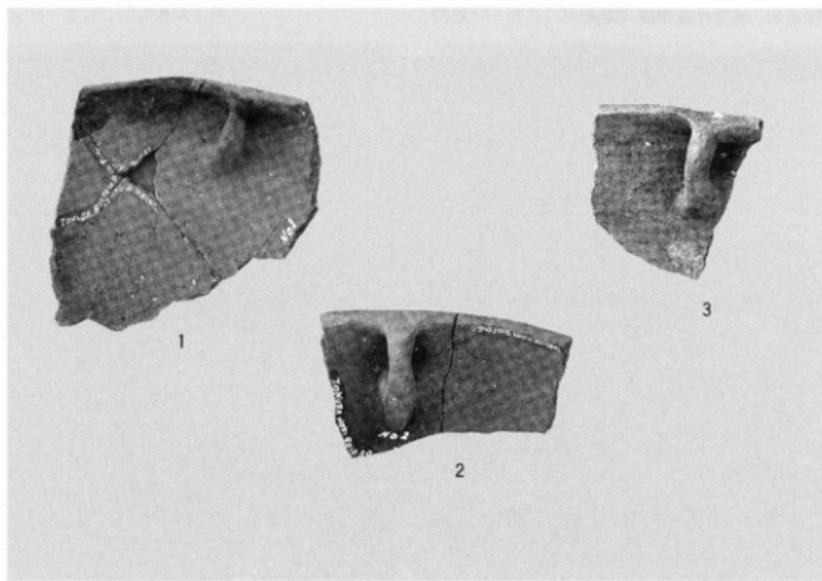


図版41 炭窯

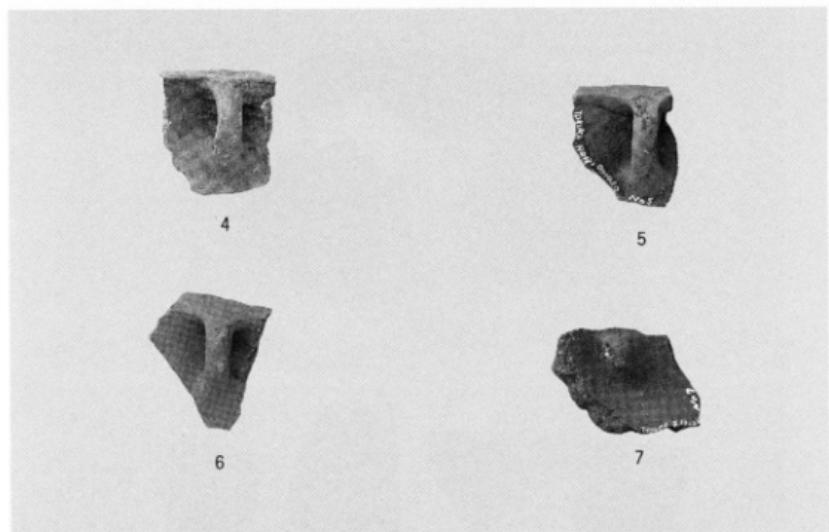
遺物の部



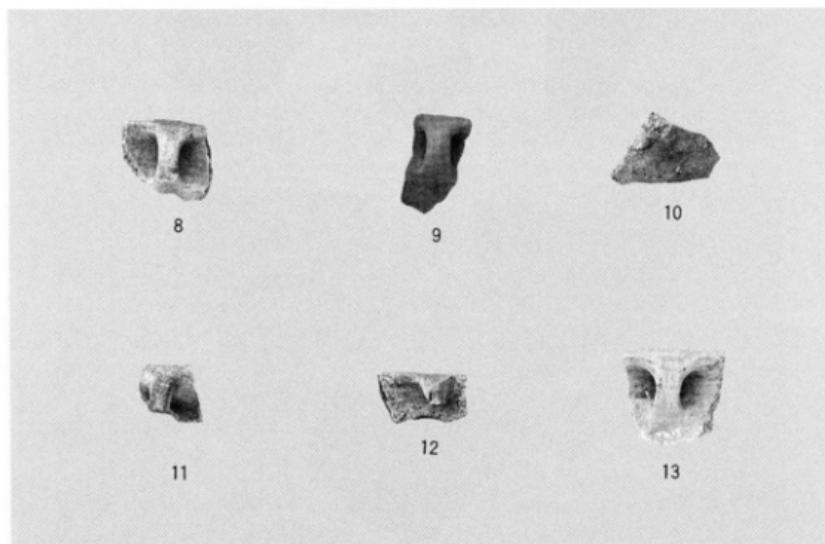
図版42 内耳土器



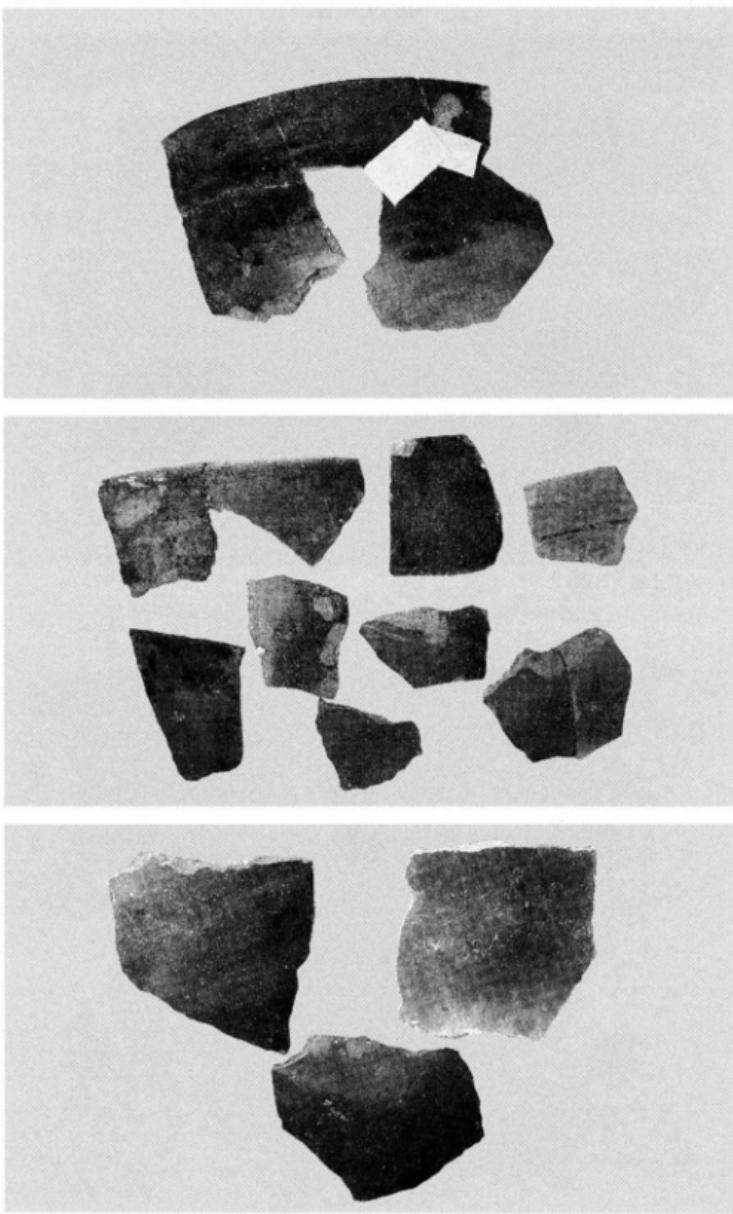
図版43 内耳土器（耳部）



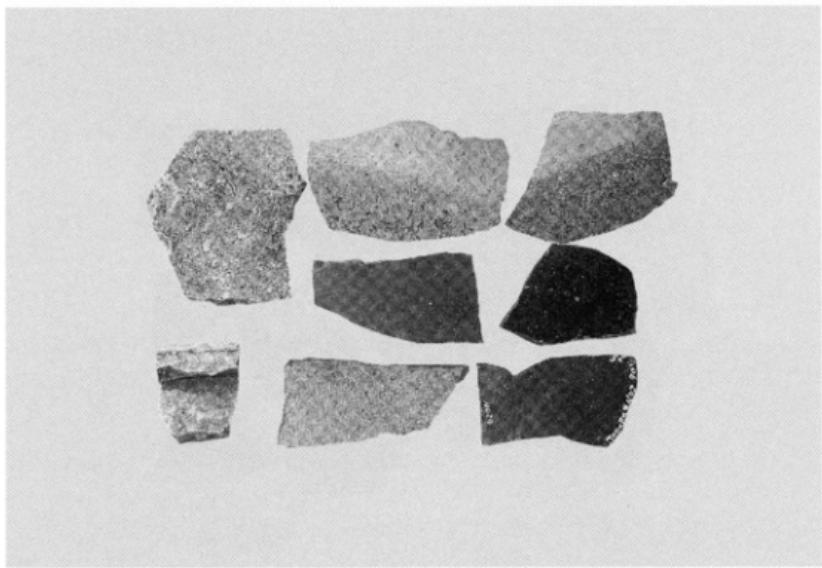
图版44 内耳土器（耳部）



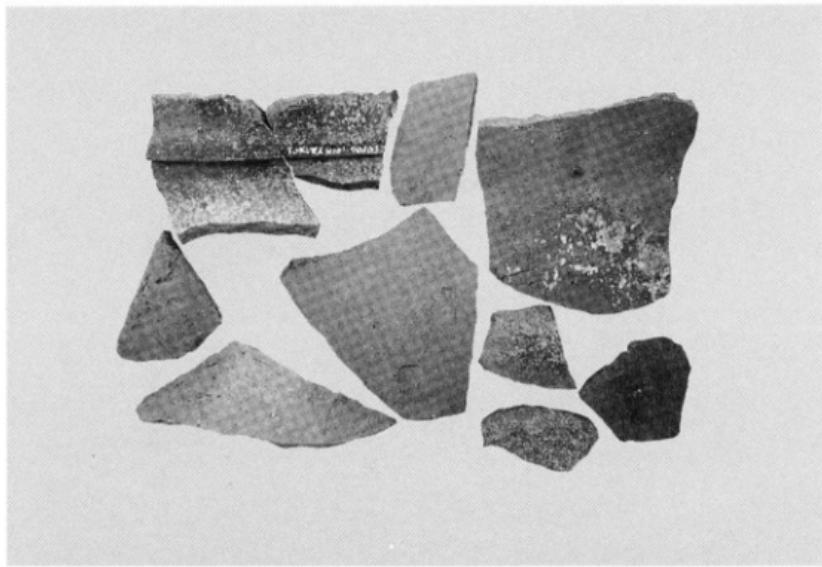
图版45 内耳土器（耳部）



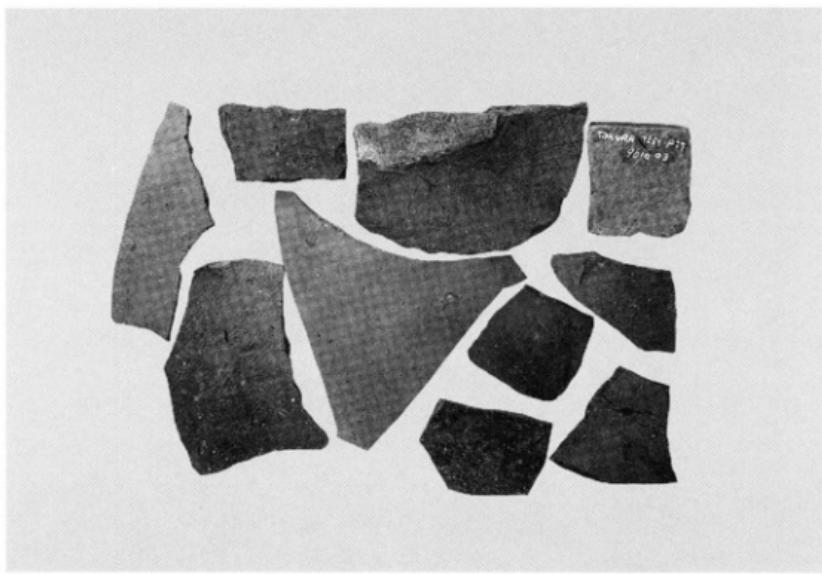
图版46 内耳土器（体部）



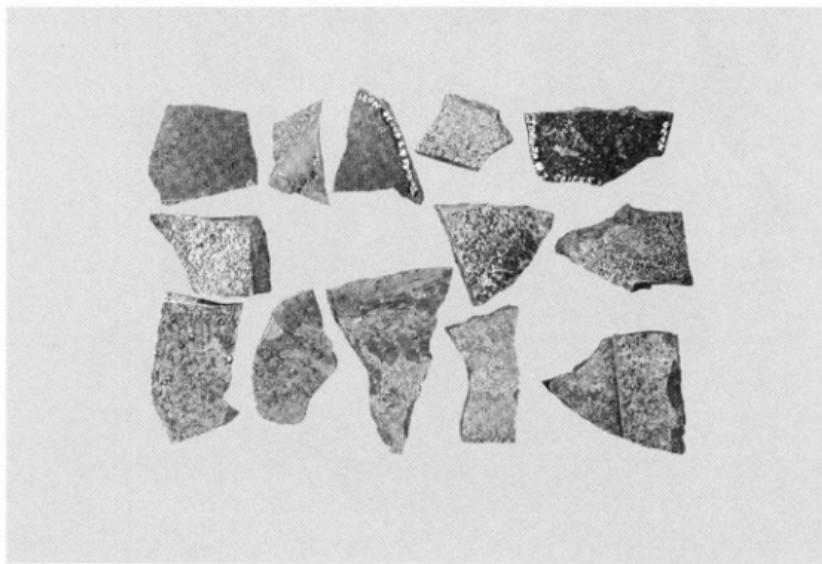
図版47 常滑焼（壊破片）



図版48 常滑焼（壊破片）



図版49 常滑焼（壊破片）



図版50 常滑焼（壊破片）



1



2



3



4

古瀬戸天目茶器



5



6



7



8



9

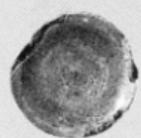


10



11

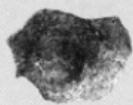
図版51 灰釉陶器片



1



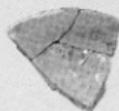
2



3



4



5



6



7



8

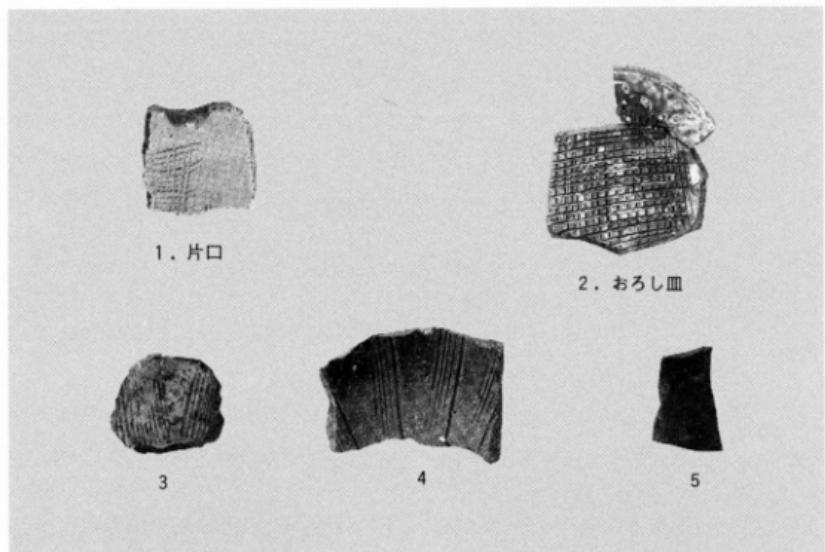


9

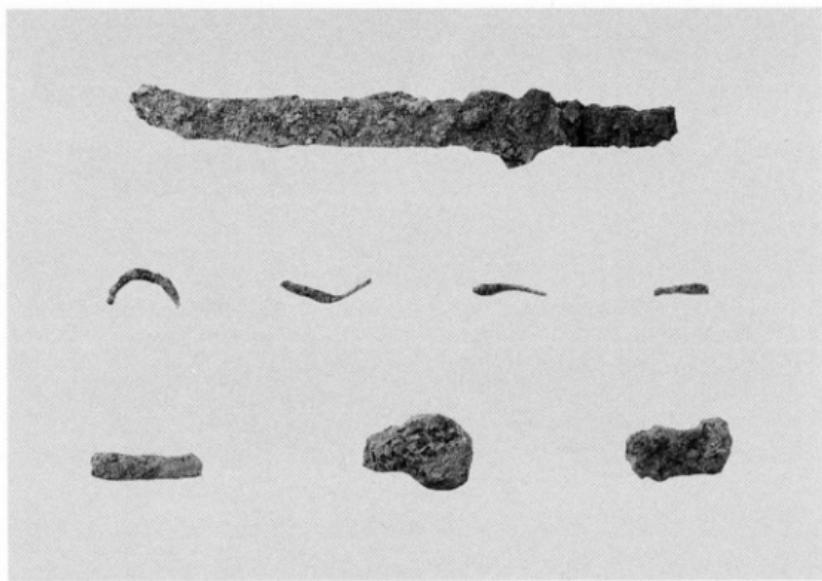


10

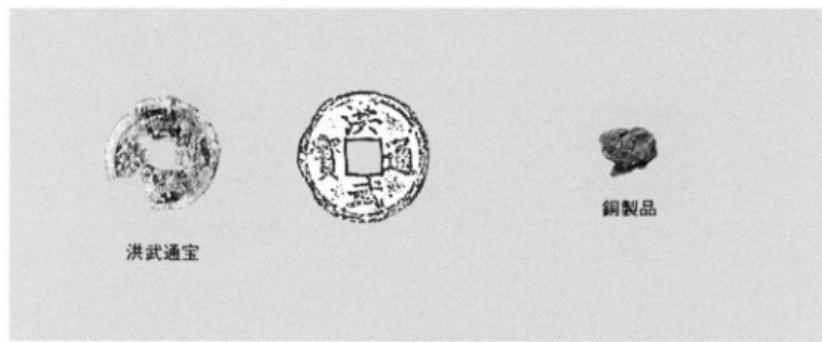
図版52 カワラケ(1~10)



図版53 片口(1)・おろし皿(2)・すり鉢(3-4-5)



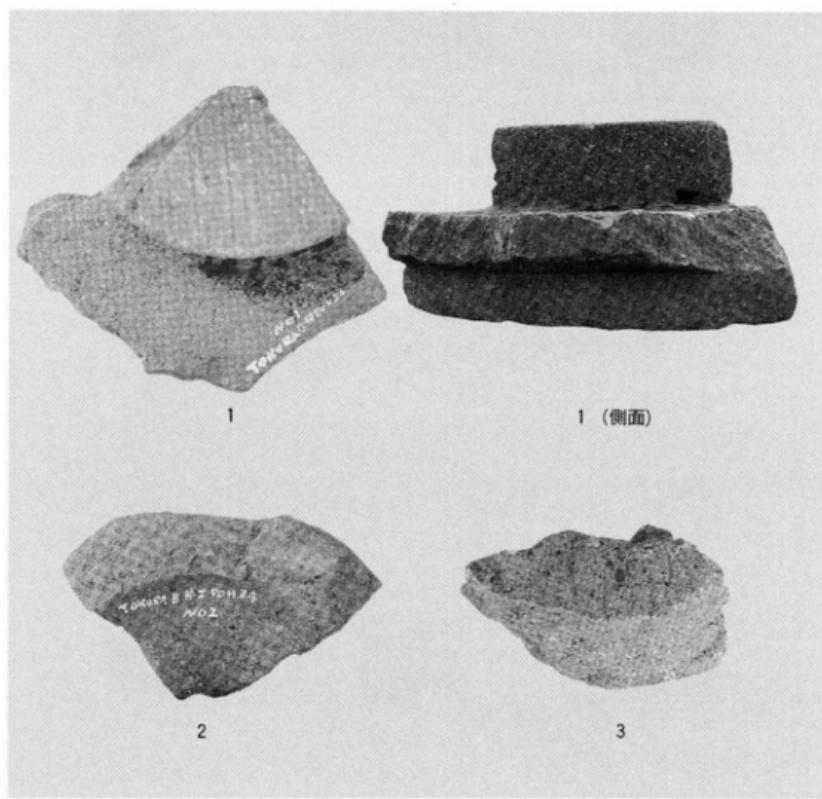
図版54 鉄製品・鉄滓



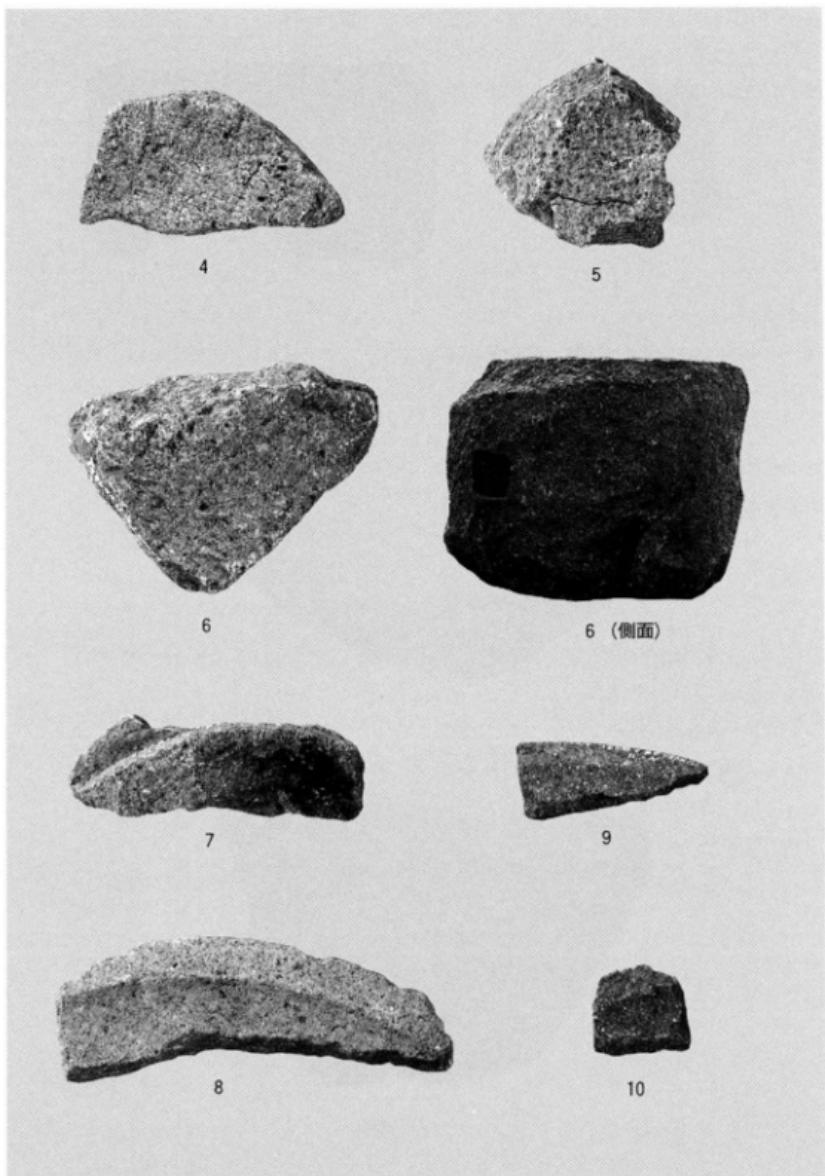
洪武通寶

銅製品

圖版55 古錢・銅製品



圖版56 石製品（石臼）



図版57 石製品（石臼）



11



12



13



13 (側面)

図版58 石製品（砾石）

終 章 む す び

この調査は、七会村立西小学校建設予定地に、戸倉館跡が所在する八瓶山南麓の舌状台地の先端部が、予定されたための発掘調査である。調査がはじまってまもなくして、見事な薬研状の空堀や階段状の出入り口部を持つ堅穴遺構（以下戸倉堅穴遺構）等が発見された。また戸倉館の時代推定については、断案を下すことは出来ないが、関係遺物の出土を見たことは成果の一つである。

- 1 堀跡や土塁の所在が検出された事によって、今回調査した範囲は、城館の外郭部であることわかった。城館の立地する台地及び周辺の地形を踏査して、現徳蔵寺本堂・庫裏を含めた境内が本郭（主殿）と考えられ、二の郭・三の郭（外郭）と舌状地を南に延びた、いわゆる複城郭の構造が想定された。（挿図3図 戸倉館跡縦張り想定図）
- 2 中世遺物の出土によって、鎌倉時代末期から室町時代にかけての、城館跡である事が推定された。しかしその終始については知ることができない。特に古瀬戸の天目茶器（破片）や茶臼の出土は、中世武士（土豪）の、生活様式をしる好資料と考えられる。
- 3 中世の堅穴遺構について、その性格等についてはよくわかっていない。本調査によって検出した、「戸倉堅穴遺構」は特異な遺構として注目してよい。

秋田県教育委員会による、「中世堅穴遺構に関する論考」（教育財団鰐淵和彦氏提供）によると、秋田県・青森県における、城館跡等の発掘調査において、戸倉堅穴遺構と同じ形態の遺構が検出された。これら出入口の張り出し部のある、堅穴遺構の性格について、住居跡・倉庫・集会所・馬屋とする説がある。現在これら堅穴遺構については、住居跡説と倉庫説が多いようである。戸倉堅穴遺構についてみると、柱穴の配置と遺物（鉄製品・木炭粒）出土。特異な遺構の検出によって、住居跡ではないかとも推考される。調査区内から焼土・焼け土・炊事用土鍋・貯藏甕片の出土は、城館時代の土豪・土民の日常生活の一つをしる遺跡ではないかと思われる。

最後に、本報告書をまとめるに当たり、関係各位からご指導・ご助言を賜わったことに対し厚く謝意を表すとともに、また内容についても、多分に独善的な考察のあることに、先学のご批正を念願して結びに換えることにしたい。

以 上

戸倉館跡発掘調査組織表

| | | | |
|------|-------|------|----------------|
| 村長 | 岩下金司 | 局長補佐 | 岩下泉 |
| 助役 | 富田梅雄 | 係長 | 富田和明 |
| 収入役 | 阿久津藤男 | 係長 | 浅野隆子 |
| 教育長 | 阿久津進 | 社教主事 | 久下沼四郎 (県派遣) |
| 事務局長 | 小林千尋 | | |

戸倉館跡発掘調査に従事した人

| | | | |
|--------|-------|-----|-------|
| 主任調査員 | 萩原義照 | 作業員 | 大森初江 |
| 調査員 | 池田晃一 | 作業員 | 阿久津悦子 |
| 調査補助員 | 須田進 | 作業員 | 富田条男 |
| 調査補助員 | 生井友一 | 作業員 | 飯村豊一 |
| 文化財会長 | 阿久津忠一 | 作業員 | 菊地タマ |
| 文化財副会長 | 仲田嘉吉 | 作業員 | 塙沢つや子 |
| 文化財委員 | 岸野教誉 | 作業員 | ト部栄 |
| 文化財委員 | 森茂春 | 作業員 | 勝村豊正 |
| 文化財委員 | 片岡大膳 | 作業員 | 勝村ちか |
| 文化財委員 | 阿久津藤男 | 作業員 | 山口孝作 |
| 作業員 | 平賀要 | 作業員 | 大木幸子 |
| 作業員 | 根本幸治 | 作業員 | 富田トシ |
| 作業員 | 阿久津忠藏 | 作業員 | 羽石栄洋 |
| 作業員 | 阿久津光弘 | | |

徳藏地区地名表

| | | | |
|--------|----------|--------|--------|
| 徳藏 | 徳藏小猿塚 | 徳藏坂下 | 徳藏板房 |
| 徳藏焼捨釜 | 徳藏川和久 | 徳藏屋敷脇 | 徳藏西浦 |
| 徳藏沢尻 | 徳藏船池 | 徳藏原 | 徳藏椿ヶ入 |
| 徳藏井戸沢 | 徳藏机 | 徳藏松葉台 | 徳藏菅ヶ沢 |
| 徳藏木和田沢 | 徳藏菖蒲田 | 徳藏久保駒 | 徳藏入山田 |
| 徳藏櫻下 | 徳藏明石沢 | 徳藏屋敷西 | 徳藏花館 |
| 徳藏岩ノ入 | 徳藏西沢 | 徳藏石倉 | 徳藏出峰 |
| 徳藏久保前 | 徳藏岩花 | 徳藏屋敷下 | 徳藏館ノ下 |
| 徳藏三斗蔵 | 徳藏台ワキ | 徳藏使者峰 | 徳藏引布山 |
| 徳藏関取前 | 徳藏ゲンデ | 徳藏林 | 徳藏久保 |
| 徳藏下内手 | 徳藏枯町 | 徳藏臺 | 徳藏門台 |
| 徳藏萩原 | 徳藏下ノ房 | 徳藏前原 | 徳藏山ノ田入 |
| 徳藏錫枝町 | 徳藏西沢前 | 徳藏西沢台 | 小勝 |
| 徳藏茂平田 | 徳藏初庭 | 徳藏下房 | 小勝下宿 |
| 徳藏堀合 | 徳藏関取 | 徳藏宮脇 | 小勝上宿 |
| 徳藏三十房 | 徳藏根堂池 | 徳藏松葉下 | 小勝古屋敷 |
| 徳藏長沢 | 徳藏池場 | 徳藏池下 | 小勝磯崎 |
| 徳藏屋敷 | 徳藏池ノ上 | 徳藏金池ヶ入 | 小勝川又 |
| 徳藏沢尻屋敷 | 徳藏大久保 | 徳藏大徳場 | 小勝川又前 |
| 徳藏谷原 | 徳藏中山 | 徳藏館ノ上 | 小勝一重山 |
| 徳藏平七田 | 徳藏嶺橋 | 徳藏五郎石 | 小勝中郷 |
| 徳藏砂押場 | 徳藏入山田 | 徳藏大館 | 小勝川シマ |
| 徳藏塙田 | 徳藏崩橋 | 徳藏堂三墓 | 小勝高戸 |
| 徳藏堂場 | 徳藏赤土平 | 徳藏二本柄 | 小勝北ノ根 |
| 徳藏中谷原 | 徳藏菖蒲沢 | 徳藏山玉塚 | 小勝岡台 |
| 徳藏石橋沢 | 徳藏岩ノ入山梨沢 | 徳藏石仏 | 小勝サツト |
| 徳藏山ノ田 | 徳藏北浦 | 徳藏長峰 | 小勝長峰 |
| 徳藏大谷原 | 徳藏山ノ田屋敷 | 徳藏清四郎峰 | 小勝高田 |
| 徳藏屋敷裏 | 徳藏大谷原台 | 徳藏中丸 | 小勝深田 |
| 徳藏廣畑 | 徳藏家前 | 徳藏臺ハキ | 小勝二反田 |
| 徳藏屋敷前 | 徳藏松葉 | 徳藏屋敷東 | 小勝押寄木 |
| 徳藏下モ田 | 徳藏屋敷上 | 徳藏堂坂 | |
| 徳藏根廻 | 徳藏札場 | 徳藏初庭入 | |

七会村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

平成3年3月5日 印刷

平成3年3月25日 発行

発行 七会村教育委員会

印刷 コトブキ印刷株式会社

水戸市千波町2398-1